



鄧小平文選

(1975年 — 1982年)

万国のプロレタリア団結せよ！

本書に収録した文章は、時間的には三つの段階に区分できる。

第一段階は一九七五年で、あわせて八篇が収録されている。鄧小平同志が「四人組」とまっこうから対決し、「文化大革命」の動乱収束に取り組んだことが記されている。

第二段階は一九七七〜一九七八年で、あわせて十三篇が収録されている。この期間、鄧小平同志は「毛沢東思想を全面的かつ的確に理解しよう」というスローガンをうち出し、「二つのすべて」がマルクス主義と合致していないことを指摘し、科学教育分野における動乱収束の活動に取り組み、実事求是のすぐれた伝統を回復することをくりかえし強調した。これらはすべて、鄧小平同志が党のマルクス主義思想路線を新たに確立するための理論面での準備をおこなったことを物語っている。



邓小平

鄧小平文選

(1975年—1982年)

中共中央 マルクス エンゲルス 著作編訳局一訳
レーニン スターリン

外文出版社
北京

出版にあたって

この文選には、一九七五年から一九八二年九月にかけて鄧小平同志のおこなった重要な講話や談話などあわせて四十七篇が収録されている。多くは未発表のものである。これ以前の著作は、この文選には収められていない。

一九七五年の言論は、「四人組」とまっこうから対決する闘争の過程で、諸分野の活動の整頓に力を入れ、「文化大革命」の動乱収束のため、安定・団結と国民経済発展の促進のため、鄧小平同志が多大な努力をはらったことを物語っている。

一九七七年以降の言論は、全党を推進、指導して混乱を收拾し、偉大な歴史的転換を実現する過程で、またマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の基本的観点とわが国の国情にもとづいて、社会主義現代化建設の正しい道および方針、政策を確立する過程で、鄧小平同志が政策決定の役割を果たし、すぐれた貢献をしたことを物語っている。

これらの論著は、不滅の歴史的意義をもつだけでなく、わが国の当面および今後の社会主義建設事業にとってもきわめて大きな指導的意義をもつものである。

本書の編集にあたり、著者が各篇の字句をすこし改めた。

中共中央文献編集委員会

一九八三年三月四日

本訳書は、北京・人民出版社一九八三年七月出版の『鄧小平文選』の完訳である。解題と巻末の原注もこの版から訳出したものである。

注釈は原注と訳注に分け、原注は漢数字を「」でかこみ、巻末においた。訳注は訳者が加えたもので、算用数字を○でかこみ、原注のあとにおいた。また注釈の末尾に本文のページ数を示した。

目次

軍隊は整頓しなければならぬ	(一九七五年一月二十五日)	1
全党は大局に目を向け、国民経済を發展させよう	(一九七五年三月五日)	5
当面の鉄鋼業で解決すべきいくつかの問題	(一九七五年五月二十九日)	11
党の指導を強化し、党の作風を整頓しよう	(一九七五年七月四日)	17
軍隊を整頓する任務	(一九七五年七月十四日)	23
国防工業企業の整頓について	(一九七五年八月三日)	39
工業の發展に関するいくつかの意見	(一九七五年八月十八日)	45
どの分野でも整頓が必要である	(一九七五年九月二十七日、十月四日)	51
「二つのすべて」はマルクス主義に合致しない	(一九七七年五月二十四日)	57
知識を尊重し、人材を尊重しよう	(一九七七年五月二十四日)	59
毛沢東思想を全面的かつ的確に理解しよう	(一九七七年七月二十一日)	63
科学・教育活動についての若干の意見	(一九七七年八月八日)	71

軍隊は教育・訓練を戦略的位置に高めるべきである (一九七七年八月二十三日) 89

教育分野の混乱收拾の問題 (一九七七年九月十九日) 99

中共中央軍事委員会全体会議における講話 (一九七七年十二月二十八日) 109

全国科学会議の開幕式における演説 (一九七八年三月十八日) 131

労働に応じた分配の原則を堅持しよう (一九七八年三月二十八日) 153

全国教育工作会議における講話 (一九七八年四月二十二日) 157

全軍政治工作会議における講話 (一九七八年六月二日) 169

毛沢東思想の旗じるしを高くかかげ、実事求是の原則を堅持しよう
(一九七八年九月十六日) 189

労働者階級は四つの現代化実現のためにすぐれた貢献をしなければならない
(一九七八年十月十一日) 195

思想を解放し、実事求是の態度をとり、一致団結して前向きの姿勢をとり
(一九七八年十二月十三日) 203

四つの基本原則を堅持しよう (一九七九年三月三十日) 225

新たな時期における統一戦線と人民政治協商会議の任務 (一九七九年六月十五日) 263

思想路線と政治路線の実現は組織路線によって保証しなければならない

(一九七九年七月二十九日) 269

中国文学・芸術活動家第四回代表大会における祝辞 (一九七九年十月三十日) 275

高級幹部は率先して党のすぐれた伝統を發揚しよう (一九七九年十一月二日) 287

当面の情勢と任務 (一九八〇年一月十六日) 313

党の路線を堅持し、活動方法を改善しよう (一九八〇年二月二十九日) 363

軍隊の精銳・簡素化をはかり、戦闘力を高めよう (一九八〇年三月十二日) 379

『建国いらいの党の若干の歴史的問題についての決議』の起草に関する意見
(一九八〇年三月~一九八一年六月) 391

農村政策の問題について (一九八〇年五月三十一日) 419

兄弟党の関係を処理する重要原則について (一九八〇年五月三十一日) 423

党と国家の指導制度の改革について (一九八〇年八月十八日) 427

イタリアの記者オリアナ・ファラチとの談話 (一九八〇年八月二十一、二十三日) 459

調整の方針を貫徹し、安定・団結を保証しよう (一九八〇年十二月二十五日) 473

誤った思想的傾向に反対する問題について (一九八一年三月二十七日) 503

党の十一期六中総の閉幕式におけるあいさつ (一九八一年六月二十九日) 509

古参幹部の第一の任務は青壮年幹部の抜てきである (一九八一年七月二日) 511

思想戦線における問題についての談話 (一九八一年七月十七日)	519
現代化、正規化した強大な革命的軍隊を建設しよう (一九八一年九月十九日)	527
機構の簡素化は革命である (一九八二年一月十三日)	531
経済犯罪活動に断固打撃を与えよう (一九八二年四月十日)	541
わが国の経済建設の歴史的経験について (一九八二年五月六日)	547
軍事委員会の座談会における講話 (一九八二年七月四日)	551
顧問委員会の設置は、指導職の終身制廃止にむけての過渡的な方法である (一九八二年七月三十日)	559
中国共産党第十二回全国代表大会における開会のことば (一九八二年九月一日)	563

原注

訳注

603 569

思想を解放し、実事求是の態度をとり、

一致団結して前向きな姿勢をとろう

(一九七八年十二月十三日)

中央工作会議の閉幕当日における講話である。この会議はその直後に招集された中国共産党第十一期中央委員会第三回総会のために十分な準備を整えた会議で、鄧小平同志のこの講話は、事実上、三中総の基調報告ともいうべきものとなった。

同志諸君

この会議は、開会以来すでに一カ月をこえ、まもなく幕をとじることになっている。中央が全党の活動の重点を四つの現代化実現へ移すという根本的な指導方針を提起し、これまで残されてきた一連の重大問題を解決したため、全党、全軍、全国各民族人民は闘志を高め、確信を強め、団結を固めている。党中央の正しい指導のもとに、全党、全軍、全国各民族人民は新たな長征のなかで、つきからつきへと新たな勝利をかちとるにちがいない。いま、われわれは確信をもって、そう断言することができる。

この会議は順調にすすみ、成功をおさめた。党の歴史のうえでも、大きな意義をもつものとな

ろう。わが党は、多年らい、このような会議を開いたことがなかった。このたびは、党の民主的な伝統が回復し、発揚されたわけで、会議は生氣にみち、活氣にあふれていた。われわれは、このような氣風を全党、全軍、全国各民族人民のなかにおし広めなければならぬ。

この会議では、党と国家の運命にかかわる多くの重要問題が討議され、解決をみた。みなが心のとびらを開いて、思うことを存分に述べ、大胆に腹をわって語り、ありのままを話した。中央の活動にたいする批判も含めて、みながどしどし批判をおこない、会議の席ではっきり考えを述べた。一部の同志は、程度の差こそあれ、自己批判もおこなった。これらはみな党内生活の大きな進歩で、今後、党と人民の事業を推進するうえで大きな役割を果たすことになる。

きょう、おもに話したいのは、思想を解放し、頭を働かせ、実事求是の態度をとり、一致団結して前向きの姿勢をとろう、ということである。

一 思想の解放は当面の重大な政治問題である

思想を解放し、頭を働かせ、実事求是の態度をとり、一致団結して前向きの姿勢をとるには、まず第一に思想を解放することである。思想が解放されてこそ、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のみちびきのもとに、これまで残されてきた問題を正しく処理し、新しく発生した一連の問題を正しく解決し、生産力の急速な発展に適應できないでいる生産関係と上部構造を正しく改革し、四つの現代化の具体的な道、方針、方法および措置をわが国の実状に即して確定すること

ができるのである。

われわれの幹部、わけても指導的幹部のあいだでは、思想の解放という問題が完全には解決されていない。少なからぬ同志は、まだ思想が解放されておらず、頭を働かせておらず、いわば硬直またはなかに硬直した状態からぬけだしていない。それは、かれらがよくない同志であるからではない。このような状態は一定の歴史的条件のもとでつくり出されたのである。

一つには、ここ十余年、林彪、「四人組」がさかんにタブーを設け禁令を敷き、迷信をつくりあげ、人びとの思想をかれらのえせマルクス主義の獄にとじこめて、そのワクから一步もふみ出すことを許さなかったことにある。それに従わないと、追及され、レッテルを張られ、打撃を受けた。このような状態のもとで、一部の人は頭を働かせ、ものを考えるのをやめるほかなかったのである。

二つには、民主集中制が破壊され、過度の権力集中による官僚主義が確かに党内に存在したことにある。その官僚主義は、しばしば「党の指導」、「党の指示」、「党の利益」、「党の規律」という仮面をつけて現われたが、実際には、取りしまり・締めつけ・押さえつけそのものであった。多くの重大問題がとかく一人か二人のツルの一声で決定され、他の者は命令どおりに動くほかなかった。このような状態では、どんな問題も考えなくてよいということになる。

三つには、是非の別、功罪の別があきらかたなく、賞罰の別もはっきりせず、働いても働かなくても同じだったことにある。ひどい場合には、よく働く者がたたかれ、何もせずに、のんびり

構えている者が「起きあがり小法師」をきめこむこともできた。このような不文律のもとでは、だれも頭を働かせようとしなくなる。

四つには、小規模生産の習慣の力があいかわらず人びとに影響をあたえていたことにある。この習慣の力のきわだった特徴の一つは、旧套を墨守して、現状に安住し、発展を求めず、進歩を求めず、新しい事物を受け入れようとする点にある。

思想が解放されず、思想が硬直すると、奇怪な現象がたくさん生まれてくる。

思想が硬直すると、教条やワクがやたらに多くなる。たとえば、党の指導を強化するとすると、党が何事も一手にひきうけ、何事にも干渉するようになるし、一元的な指導を実行するとすると、党と行政が混同され、党が行政に取ってかわるようになる。また、中央の統一指導を堅持するとなると、「すべての規格を合わせよう」ということになってしまう。中央の政策の根本原則にそむく「土着政策」には反対すべきだが、「土着政策」のなかにも確かに実状に即して、大衆から受けいれられているものがある。ところが、こうした正しい政策が「規格に合わぬ」ものとして、とかく非難されるのである。

思想が硬直すると、風見鶏の傾向が多くなる。何を言い、何をすることも、党性や原則とはおかまいなしに、「勢力」を見、風向きを見る。そうすれば、誤りを犯さなくてすむと思こんでいるのだ。その実、風向きで変わること自体が共産党員の党性にそむく大きな誤りである。独自に思考して、大胆にものを考え、大胆にものを言い、大胆に事をおこなうなら、もちろん、誤りを

犯しやすい。だが、そのような誤りははつきりしているので、是正するのは容易である。

思想が硬直すると、実際から出発しない「書物主義」もひどくなる。書物にないこと、文書にないこと、指導者の述べていないことは、一言も口に出せず、一つも行動にうつせず、何もかも丸うつしにし、言われたまま実行する。これでは、上司にたいして責任を負うことと、人民にたいして責任を負うことを対立させることになってしまう。

思想の硬直化を打破し、幹部と大衆の思想を大いに解放するのだから、四つの現代化は望めない。

実践は真理を検証する唯一の基準であるという問題について、いま討論がおこなわれているが、これは実質的には、思想を解放するかどうかにかかわる論争でもある。みなも認めるとおり、この論争は非常に必要なもので、意義が大きい。論争の状況を見れば見るほど、その重要さが分かってくる。もしも党なり、国家なり、民族なりがすべて書物から出発して、思想が硬直し、迷信がはびこるようになれば、もはや前進することができなくなり、生命力が枯渇し、党も国家も亡びてしまうにちがいない。これは、整風運動のさい、毛沢東同志がくりかえし述べたことである。思想を解放し、实事求是の原則を堅持し、なにことも実際から出発し、理論と実際を結びつけてこそ、われわれの社会主義現代化建設は順調に進捗するのであり、わが党のマルクス・レーニン主義、毛沢東思想についての理論は順調に発展するのである。この意味から言って、真理の基準の問題についての論争は、たしかに思想路線の問題であり、政治の問題であり、

党と国家の前途と運命にかかわる問題である。

実事求是は、プロレタリア世界観の基礎であり、マルクス主義の思想的基礎である。これらで、われわれが革命でおさめた勝利は、みな実事求是によるものであった。これから、四つの現代化をすすめるにも、やはり実事求是によるほかはない。中央、省委員会、地区委員会、県委員会、人民公社の党委員会ばかりでなく、工場、機関、学校、商店、生産隊のそれぞれにいたるまで、すべてが実事求是の態度をとり、思想を解放し、頭を働かせて、物事を考え、物事を処理しなければならない。

党内と人民大衆のなかに、頭を働かせ、問題を考える人が多ければ多いほど、われわれの事業に有利である。革命をおこなうにも、建設をすすめるにも、大胆にものを考え、大胆に道を探り、大胆に新事業を始める一群の猛将がいなくてはならない。このような一群の猛将がいなくては、貧しい、立ち遅れた状態から脱却することはできず、国際的な先進レベルを追いぬくことはおろか、これに追いつくこともできはしない。各級の党委員会とすべての党支部は、党員や大衆が大胆にものを考え、大胆に道を探り、大胆に新事業を始めるよう、これに激励と支持をあたえて、大衆が思想を解放し、頭を働かせるのを促進すべきである。われわれはそのことを期待してやまない。

二 民主は思想解放の重要な条件である

思想を解放し、頭を働かせるには、プロレタリアートの民主集中制を真に実行することが非常に重要な条件である。われわれには集中した統一的指導が必要であるが、正しい集中のためには十分な民主がなくてはならない。

いまのこの時期には、とりわけ民主を強調する必要がある。それというのも、これまでずいぶん長いあいだ、民主集中制を真に実行したことがなく、ともすれば民主から離れて集中を論じ、あまりにも民主をなおざりにしてきたからである。いま、大胆にものを言うのは、まだ少数の先進分子に限られている。われわれのこの会議では、先進分子がやや多いが、全党、全国から見ると、多くの人はまだそれほど大胆にものを言うわけではない。よい意見もそれほど大胆には言わないし、よくない人やよくない事柄についてもそれほど大胆には反対しない。このような状態を変えなければ、みなに思想を解放させ、頭を働かせることなど、できるわけがない。四つの現代化など、やれるわけがないのだ。

われわれは民主的な条件をつくりだすべきであり、揚げ足をとらない、レッテルを張らない、棍棒をふりまわさない、という「三つのことをやらない主義」をあらためて宣言すべきである。党内と人民内部の政治生活では、もっぱら民主的な手段によるべきで、抑圧や打撃の手段に訴えてはならない。憲法と党規約の規定する公民の権利、党員の権利、党委員会委員の権利は、断固として保障しなければならず、何人もこれを犯すことは許されない。

先日、天安門事件〔三〕について名誉回復をおこなったが、全国各民族人民は喜びにわきた

ち、人民大衆の社会主義的積極性は大きいにもりあがった。大衆が意見を出したことは許されるべきだ。かりにごく少数の下心のある不満分子が民主をタテにとつて騒動をおこそうとしても、なにも恐れることはない。処理は適切におこなうべきで、大多数の大衆には是非の分別があることを信じるべきである。革命政党にとって、恐ろしいのは人民の声が聞こえないこと、一番恐ろしいのはしんと静まりかえっていることである。現在、党の内外で真偽の入りまじった裏口のニュースが多くなったのは、長いあいだ、政治的民主が欠けていたことへの懲罰だと言つてよい。集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば、個人の気持ちのびのびし、生き生きとして活発でもある、という政治的局面があれば、裏口のニュースは少なくとも、無政府主義もわりに克服しやすくなる。われわれの人民は大局を考え、全局に目を向け、規律を守る人民だ、とわれわれは信じている。われわれ各級の指導的幹部、わけでも高級幹部は、党規律の厳守、党内機密の厳守を心がけるべきで、裏口で取りぎたをしたり、手書きの文書をまわし読みしたりしてはならない。

人民大衆の出してくる意見のなかには、もちろん、正しいものもあれば、正しくないものもある。分析をしなければならぬ。党の指導とは、人民大衆の正しい意見をよく集中し、正しくない意見には適切な説明をくわえることである。思想問題については、いかなる場合も、屈服の方法を用いてはならず、「百花斉放、百家争鳴」の方針を真に実行すべきである。大衆のあいだにすこしでも論議があり、わけでもやや鋭い論議があると聞くと、すぐ「政治背景」や「政治

デマ」を追及し、事件に仕立てあげて、打撃をあたえ、抑圧する。このような悪質な作風は、断固やめさせるべきだ。毛沢東同志が以前から述べているように、こうした状況は、事実上、軟弱の現われであり、神経衰弱の現われである。われわれの各級の指導者は、大衆と対立するような局面を絶対にひき起こしてはならない。これは、ぜひとも守らねばならぬ原則である。わが国にはまだごく少数の反革命分子がいるので、もちろん、それらにたいする警戒心を失ってはならない。

ここで、経済的民主を發揚する問題について、とくに述べておこう。いま、わが国の経済管理体制は権力が集中しすぎていて、計画的かつ大胆にこの権力を下へおろすべきだ。さもなければ、国家、地方、企業および勤労者個人というこの四者の積極性を十分發揮させるのに不利であり、現代的な経済管理の実施と労働生産性の向上のためにも不利である。地方、企業、生産隊には、経営管理の面でもっと多くの自主権をあたえるべきである。わが国にはこんなに多くの省・市・自治区があり、中くらいの省でも欧州の大国に匹敵するのだから、認識、政策、計画、指揮、行動を統一するという前提のもとに、経済計画や財政、貿易などの面でもっと幅広い自主権をもたせるべきである。

当面、もっともさし迫った課題は、工鉱業企業と生産隊の自主権を拡大し、個々の企業と生産隊があらゆる方策を講じて創造精神を發揮できるようにすることである。個々の生産隊に経営の自主権をもたせると、作物を植えつけていない土地がちよつとあつたり、養殖業に利用されてい

ない水面がちょっとあると、公社員や幹部は夜の目も覆わずに、いろいろ頭を使って、方法を講じるものだ。全国の数十万の企業、数百万の生産隊が頭を働かすようになれば、どれほど富を増やせることだろう。国のために多くの富をつくり出すのだから、個人の所得はもっとひき上げるべきであり、集団福祉ももっと充実させるべきである。働けば働くだけ報酬が増えるというのではなく、物質的利益も重視されないとこののであれば、少数の先進分子はそれでよくても、広範な大衆には通用しない。短期間はやれても、長期間は無理である。革命精神は非常に尊いもので、革命精神がなければ、革命行動などありえない。だが、革命とは、物質的利益の土台のうえに生まれるものだ。献身的精神のみを重視し、物質的利益を重視しないのは、観念論である。

また、民主的選挙、民主的管理、民主的監督を含め、労働者や農民個人の民主的権利も確実に保障しなければならぬ。個々の職場主任や生産隊長に生産の責任を負わせ、方法を講じさせるばかりでなく、個々の労働者や農民にも生産の責任を負わせ、方法を講じさせるべきである。

人民の民主を保障するには、法秩序を強化しなければならない。民主の制度化、法律化のため、指導者が更迭したからといって、あるいは指導者の考え方や注意力の振りむけ方が変わったからといって、すぐ制度や法律が変わるようなことを防がなければならぬ。いまの問題は、法律がとこのつておらず、多くの法律がまだ制定されていないことにある。とかく指導者の言葉が「法」とみなされて、指導者の言葉に賛成しなければ「違法」とされ、指導者の言葉が変われば、「法」もそれにともなって変わる。それゆえ、刑法、民法、訴訟法、その他の必要な法律、たと

えば工場法、人民公社法、森林法、草原法、環境保護法、労働法、外国人投資法などの制定に力をそそぎ、一定の民主的な手続きを経て、討議にかけ、成立させるとともに、また、検察機関や司法機関も強化して、依拠すべき法をつくり、法があるからには必ず依拠し、法を執行するからには必ず厳正を旨とし、法に違反したからには必ず追及する、というようにしなくてはならない。国と企業、企業と企業、企業と個人といった関係も法律の形で規定し、それらの間の矛盾も、多くは法律で解決するようにしなくてはならない。いまは、立法の仕事が多く、人手も足りないもので、はじめのうちは法律の条文も少々おまかでよく、逐次とこのえてゆけばよい。一部の法規は、まず地方で試験的に実施してから、これを総括して、練りあげ、全国で施行する法律を制定するようにする。法律の改正、補足にあたっては、機が熟したものから一カ条ずつ改正、補足すればよく、何もかもそろった「プラント」の総仕上げを待つにはおよばない。とにかく、法律があれば、ないよりもよいし、施行が早まれば、遅れるよりもよい。なお、われわれは国際法の研究を大いに強化すべきである。

国には国法がなくはならず、党には党の規律、党の法規がなくはならない。党規約とは、もっとも根本的な党の規律、党の法規である。党に規律と法規がなければ、国法の執行も保障されにくい。各級の規律検査委員会と組織部門の任務は、事件を処理することにとどまらず、もっと重要なのは、党の規律と党の法規をまもり、われわれの党風を確実によくしていくことである。党の規律にそむく者があれば、何人になりたいしても、規律を執行して、功罪の別、賞罰の別を

はつきりさせ、正しい気風を伸ばし、よこしまな気風を打ちのめさなければならぬ。

三 残されてきた問題を処理するのは、 前向きの姿勢をとるためである

この会議では、これまでに残されてきた問題を解決し、一部の人がどの功罪をはつきりさせ、重大な冤罪・誤審・デッチ上げ事件を是正した。これは、思想を解放するうえでも、安定・団結を実現するうえでも必要なことである。その目的はほかでもなく、前向きの姿勢をとること、全党の活動の重点を順調に切りかえることにある。

われわれの原則は、「誤りがあれば必ず正す」というものである。これまでに誤って処理した問題は、のこらず是正しなければならぬ。すぐに解決できない問題があれば、閉会後に残して、ひきつづき解決する必要がある。だが、できるだけ早く、実際に即して解決し、きれいさっぱり解決することが必要で、いろいろな尻尾を残すようなことがあってはならない。これまでに残されてきた問題は、適切に解決すべきだ。解決しないのはよくない。誤りを犯した同志が自己批判しないのもよくないし、かれらを適切に処分しないのもよくない。だが、何もかも申し分なく解決するよう要求するのは無理であり、そうすべきでもない。大所高所に目をつければ、少々大まかでもよい。細かい点までいちいちはつきりさせるのは不可能であり、必要でもない。

安定と団結は、きわめて大切である。全国の各民族人民の団結を固めるには、何よりもまず全

党の団結を固めるべきであり、わけても党の指導的中核の団結を固めるべきである。わが党の団結は、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の土台のうえにきずかれるものだ。党内では、理論と路線については是非の別をはつきりさせるべきであり、批判と自己批判をくりひろげて、互いに助け、監督しあい、さまざまの誤った思想を克服すべきである。

誤りを犯した同志にたいしては、自分で経験と教訓を総括し、その誤りを認識、是正するよう促さなければならぬ。かれらには、じっくり考える時間を与える必要がある。重大な是非の問題については認識し、自己批判をすれば、歓迎の意を表すべきである。人を処分するには、慎重なものではなくてはならない。過去の誤りにたいしては、寛大な処分でも嚴重な処分でもよいというような場合、寛大に処分する。だが、今後、発生する問題については、嚴重に処分すべきである。一般党員は寛大に処分するが、指導的幹部は嚴重にし、わけても高級幹部の場合はいっそう嚴重に処分しなければならない。

今後、幹部を抜てきするには厳格でなくてはならない。毆打・破壊・強奪を事とする者、派閥意識の強い者、魂を売りわたして同志を陥れる者、党のもっとも大切な利益も眼中に置かない者、こうした連中を絶対に取り立ててはならない。風向きをみて舵をとる者、うしろだてを探しまわるもの、党の原則を顧みない者も軽がるしく信任してはならず、警戒心を高め、教育をほどこし、かれらに世界観を改造するよう促すべきである。

最近、国内国外を問わず、毛沢東同志と文化大革命へのわれわれの評価が非常に注目されてい

る。毛沢東同志が長期の革命闘争でうち立てた偉大な功績は、永遠に不滅のものである。思うに、一九二七年の大革命失敗後、もしも毛沢東同志のすぐれた指導がなかったら、中国の革命はいまだに勝利を得ていない可能性が大いにある。その場合、中国の各民族人民はいまなお、帝國主義、封建主義、官僚資本主義の反動支配のもとにおかれ、われわれの党はいまだに暗黒のなかで苦しい闘いをつづけていることであろう。したがって、毛主席なくして新中国なし、と言うのはいさかも誇張ではない。毛沢東思想はわれわれ一時代の人間をつちかてきた。ここに在席している同志諸君もみな毛沢東思想にみちびかれてきたと言ってよい。毛沢東思想なくして、今日の中国共産党はありえないということ、これまたいさかも誇張ではない。毛沢東思想は永遠にわれわれ全党、全軍、全国各民族人民のもっとも貴重な精神的財産である。われわれは、毛沢東思想の科学的原理を全面的かつ的確に理解し、把握するとともに、新たな歴史的条件のもとでそれを発展させなければならない。もちろん、毛沢東同志にも欠点や誤りがなかったわけではない。革命の指導者に欠点や誤りがなくことを求めるのは、マルクス主義ではない。われわれは全党の黨員、全軍の将士、全国各民族の人民が、毛沢東同志の偉大な功績を科学的かつ歴史的に認識するよう、これを指導し、教育してゆくべきである。

文化大革命についても、科学的かつ歴史的に見るべきである。毛沢東同志があのような大革命をおこしたのは、主として修正主義に反対し、修正主義を防止するという考えからであった。実際の過程で生まれた欠点や誤りについては、適切な時期に経験、教訓として総括することが、全

党の認識を統一するうえで必要である。文化大革命は、すでにわが国社会主義の歴史的発展の一段階となっているので、いつかは総括すべきであるが、別に急ぐことはない。このような歴史的段階について科学的な評価をくだすには、真剣な研究をおこなう必要がある。一部の問題はもっと時間をかけないと、十分な理解や評価は無理なので、その時になってからこの段階の歴史を説明する方が、いま説明するよりよいかも知れない。

四 新しい状況を研究し、新しい問題を解決する

前向きな姿勢をとるには、新しい状況を適時に研究し、新しい問題を適時に解決すべきである。さもなければ、順調に前進することはできない。各方面の新しい状況を研究すべきであり、各方面の新しい問題を解決すべきである。わけても管理方法、管理制度、経済政策というこの三つの面の問題の研究と解決に意をそそぐべきである。

管理方法の面では、当面、とくに官僚主義の克服に意をそそぐべきである。

官僚主義というのは小規模生産の所産で、社会化した大規模生産とは根本的にあいられない。四つの現代化をすすめて、社会主義経済を全面的に大規模生産の技術的基礎のうえに移すには、ぜひとも官僚主義の禍根を克服すべきである。いま、われわれの经济管理活動は、機構が肥大化して、いく重にもかさなり合い、手続きが繁雑で、能率がきわめて低い。政治的な空談義がとかくすべてをおおいかくしている。これは、どこかのある同志たちの責任ではなく、われわれが長

年らい改革を適時に提起しなかったところに責任がある。にもかかわらず、いまなお、改革を断行しないなら、われわれの現代化と社会主義の事業は破算になるにちがいない。

われわれは、経済的な方法で経済を管理することを学びとるべきである。自分が分らないのなら、専門家に学び、外国の進んだ管理方法に学ぶべきだ。新しく導入した企業を外国の進んだ方法で管理するだけでなく、既存の企業も進んだ方法で改造する必要がある。全国の統一的な案が出されるまでは、まず局部で手をつけ、個々の地区、個々の業種でやってみてから、一步一步おしひろめていけばよい。中央の各部門は、このように試験的にやってみることを許可し、奨励すべきである。試行の段階では、さまざまな矛盾が出てくるから、それをいちはやく発見し、克服しなければならぬ。このようにしてこそ、かなり速い進歩をとげることができるのである。

政治路線がすでに解決されているのだから、今後、経済部門の党委員会が果たしてうまく指導できているのかどうか、その指導がすぐれているのかどうかを見るには、主としてその経済部門が進んだ管理方法を実施しているのかどうかを見るべきで、技術革新はどのように進展しているか、労働生産性はどれだけひき上げられたのか、利潤はどれだけ増えたのか、労働者の個人所得と集団福祉はどれだけ高まったのかを見るべきである。各分野の各級党委員会の指導も、これに似た基準で評価しなければならぬ。これが今後の主な政治である。この主な内容から離れた政治は、口先だけの政治で、党と人民の最大利益からかけ離れたものとなる。

管理制度の面では、当面、とくに責任制の強化に意をそそぐべきである。

いま、各地の企業・事業体や党と国家の各級機関でたいへん大きな問題は、責任をもつ者が誰もいないことである。建前は集団責任でも、実際には責任者不在にひとしい。ある仕事の配置が終わったあと、それが実行に移されたのかどうかを点検する人もいないし、その結果のよしあしを監督する人もいない。だから、早急に厳格な責任制を確立する必要がある。レーニンも、「集団指導を引合いにだして、無責任をとりつくりうことは、もつとも危険な害悪であり」、「できるだけ速やかに、すこしもためらうことなく、なにがなんでも、この害悪を根絶しなければならぬ」〔天〕と述べているではないか。

いかなる任務、いかなる建設プロジェクトについても、その任務、従業者、量、質、時間などをそれぞれ定めておくという制度を実施すべきである。たとえば技術設備の導入のばあい、どのようなプロジェクトを導入するのか、どこから、どこへ導入するのか、また、どんな人が参加するのかなどを具体的に定めておかなければならない。導入プロジェクトについてもいくつもの項目を定めねばならないが、既存の企業についてもいくつもの項目を定めなければならぬ。いま、尻をたたかれるのは計画委員会と党委員会に限られているが、これでは問題の解決にならない。やはり具体的な責任者の尻をたたかねばだめである。同様に、報奨も具体的な集団と個人にまで届かねばだめだ。われわれは党委員会指導下の工場長責任制を実施するばあいに、職責の明確ということを徹底させなければならぬ。

責任制の役割を真に発揮させるには、次のいくつかの面で措置をとらなければならない。

一つには、管理者の権限を拡大することである。管理者に責任をもたせるからには、その人に権限を与えなくてはならない。工場長、技師、技術者、会計係・出納係は、それぞれ責任もあれば、権限ももつべきで、他の者がそれを侵してはならない。責任はもたせるが、権限を与えないというのでは、責任制も破算である。

二つには、人材の起用に長じ、適材を適所に置くことである。専門家を発見、育成、重用し、さまざまな専門家の政治的地位と物質的待遇をひき上げなければならぬ。では、人材起用の政治的基準とは何かといえ、人民に幸福をもたらし、生産力を発展させ、社会主義事業のために積極的に貢献すること、これが主要な政治的基準である。

三つには、厳格な考課をおこない、賞罰をはっきりさせることである。企業、学校、研究機構、機関などはみな、それぞれの職務について比較・評定と考課をおこない、学術上、技術上の職名や栄誉称号をあたえるべきである。仕事の成績の大小、優劣に応じて、褒賞もすれば処罰もし、格あげもすれば格下げもする。そして、その賞罰やポストの上げ下げは物質的利益と結びつけなければならない。

要するに、責任制を強め、賞罰を明らかにすることによって、各分野で先進をめざして競いあい、奮起、向上するような気風をつくり出すことである。

経済政策の面では、一部の地区、一部の企業、一部の労働者、農民がその勤勉な努力によって好成績をあげた場合、他のものよりも先に高い収入を得、よい生活を送るようになるのを、わた

しは許すべきだと考える。一部の人の生活が先によくなれば、大いに模範を示す力が生まれて、まわりに影響をあたえ、他の地区、他の単位の人びとを見ならわせるにきまつている。こうなれば、たえず波がおしよせるように国民経済全体があとからあとへと発展し、全国の各民族人民がかなり急速に豊かになるにちがいない。

もちろん、西北、西南、その他の一部の地区では、生産と大衆の生活にまだかなりの困難がある。国は各方面からの援助、わけても物質面からの力強い支持をあたえるべきである。

これは、国民経済全体に影響をあたえて、それを促進していくことのできる重大な政策である。同志諸君の真剣な考慮と検討をお願いしたい。

四つの現代化を実現する過程では、われわれの熟知しないか、予期することもできない多くの新しい状況、新しい問題が生まれてくるのは必至である。わけても生産関係と上部構造の改革は、順風一路というわけにはいくまい。多くの面にかかわり、多くの人の切実な利益にかかわってくるので、さまざまな複雑な状況や問題があらわれ、かずかずの障害につきあたるにきまつている。たとえば、企業の再編成をしようとすると、人員を残す残さないの問題が出てくるし、国家機関を改革しようとすると、かなりの公務員の配置転換をやることになり、一部に不満をもつ者が現われる、といった具合だ。これらの問題はすぐ出てくるから、十分な心がまえをしておかなければならない。大局に目を向けて、党と国家全体の利益を大切にしよう、黨員と大衆を教育すべきである。われわれは確信にみちみちていなくてはならない。大衆を信じ、大衆路線をと

り、状況と問題をはっきり大衆に説明しさえすれば、いかなる問題も解決でき、いかなる障害ものりこえることができる。経済の発展にともなって、道はますます広くなり、人びとはいよいよその所を得るようになる。これは疑いの余地がないことである。

四つの現代化を実現するのは、底の深い、偉大な革命である。この偉大な革命の過程で、われわれは新しい矛盾を次から次へと解決しながら前進していくのだ。したがって、全党の同志はかならずよく学習すること、くりかえし学習することに長じていなければならない。

全国的な勝利の直前、毛沢東同志は全党に向けて再学習をよびかけた。あのときの学習がうまくいったので、都市へ入ったのち、われわれは急速に経済の回復をはかり、みごとに社会主義的改造をなしとげることができた。だが、近年の学習はうまくいかなかったことを認めなくてはならない。おもな精力を政治運動に向け、建設の腕前を身につけなかったので、建設をうまくおしすすめることができず、政治面でも重大な挫折に見舞われた。いまは、現代化建設をやらねばならないのに、なおさら分かっていない。したがって、全党の同志は、もう一度、学習をやりなおさなければならない。

では、何を学ぶのか。根本的には、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を学ぶのであり、マルクス主義の普遍的原则をわが国の四つの現代化の具体的実践に結びつけるよう努力するのである。当面、大多数の幹部は、なお次の三つの面の学習に力をいれなければならない。一つは経済学、もう一つは科学技術、さらにもう一つは管理の学習である。しっかりと学習してこそ、高速

度、高水準の社会主義現代化建設をりっぱに指導することができる。実践のなかから学び、書物のなかから学び、自分自身と他人の経験、教訓のなかから学ぶことだ。保守主義と書物主義を克服しなければならない。数百名の中央委員、数千名の中央と地方の高級幹部は、率先して現代化経済建設の研さんにつとめるべきである。

みなが一致団結し、心を一つにして、思想を解放し、頭を働かせ、これまで知らなかった物事を学びとるなら、われわれの新たな長征の歩調はきつと速くなるにちがいない。党中央と國務院の指導のもと、立ち遅れたわが国の面目を一新し、わが国を現代化した社会主義強国に築き上げるため、われわれは勇往邁進しようではないか。

四つの基本原則を堅持しよう

(一九七九年三月三十日)

党の理論活動座談会における講話である。

同志のみなさん

党の理論活動座談会が開かれてから、もうかなりの期間になる。閉幕も近づいたので、党中央の委託をうけ、いくつか意見を述べてみたい。

一 情勢と任務について

この会議は、党の十一期中総の決定にもとづいて開かれたものである。党の十一期中総とその直前に開かれた中央工作会議は、「四人組」粉砕いらい党中央のすすめてきた多くの活動を評価して、林彪、「四人組」摘発・批判の大衆運動が全国的にみごと完了したものと考え、今年から全党の活動の重点を社会主義現代化建設へ移すことを決定した。三中総はまた、全党、全軍、全国各民族人民の団結をかため、四つの現代化の壮大な目標をめざして前進するため、党の歴史上のこされてきた一連の重大問題を解決した。この二つの会議は、党の歴史において大きな

意義をもつものである。三中総後に開かれた今回の理論活動座談会では、みな思想を解放して、各自の見解を述べ、検討に値する注目すべき問題を少なからず提起した。総じて、成果のある会議であったと言つてよい。わたしは中央工作会議の席上、思想を解放し、頭を働かせ、実事求是の態度をとり、一致団結して前向き姿勢をとるべきだ、と述べておいた。いまもなお、この方針はゆるぐことなく実行しなければならぬ。大切なことは、実際から出発し、当面の情勢、任務としっかり結びつけて、この方針をさらに深く宣伝し、貫徹することである。

「四人組」粉砕後、わけても三中総いらいの情勢については、十分かつ全面的な評価をくだすべきである。「四人組」粉砕後の二年半、われわれは「四人組」の反革命政治勢力を基本的に粉砕して、各級指導グループの調整と充実をはかり、党・政府・軍隊の指導権を人民の信頼できる幹部の手に基本的におさめ、党・政府・軍隊の活動においても正常な秩序を基本的に回復した。これは非常に大きな、容易ならぬ成果である。われわれは林彪、「四人組」のもたらした十年の混乱状態からぬけ出して、安定・団結の政治的局面を実現した。これは、われわれの社会主義現代化建設事業にとつて欠くことのできない条件であり、保証である。在席の諸君の一人びとり、わが党の全党員、わけても指導的責務を負う党員がみな、この政治的局面を大切に、それを守つていくことに十分意をそそがなければならない。安定と団結には、当然、原則というものがある。林彪、「四人組」にたいする摘発、批判を通じて、わけても昨年冬に開かれた中央工作会議と三中総でおこなわれた思想・理論問題の討議を通じて、われわれは、思想の方向と政治の方

向の面では基本的にマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の正しい軌道にもどつたと言つことができる。われわれは永遠にこの軌道を前進するであろう。国民経済の状況はすでに好転し、各部門の生産も急速に回復した。このような政治情勢と経済情勢が生まれたので、全党は活動の重点を今年から社会主義現代化建設に移すことができるようになった。これは、わが国の歴史における偉大な転換である。われわれはこれまで多年にわたつて社会主義建設をすすめてきたが、いまや新しい歴史的発展段階のスタートラインに立つたと論断してよい理由が十分にある。ここ三ヶ月余の情勢の発展は、三中総の方針が正しく、全党と全国各民族人民の力強い支持を得ていることを十分に物語っている。全国的にみて、安定・団結の局面はひきつづき定着しつつあり、党内党外の活気にみちた民主化がひきつづき発展している。党のすぐれた伝統が大いに回復され、党内党外の思想が大いに解放されて、実事求是の作風も日まじに人心に浸透しつつある。党のさまざまな政策が着実に実行されたことによつて、党内党外の幾億の人びとが意欲を燃えあがらせ、三中総の農業に関する二つの文書〔五〕は広範な農民と農村幹部に心から歓迎されている。ベトナムにたいするわが国の自衛反撃戦〔六〕の勝利は、国際的な反覇権闘争におけるわが国の威信を大いに高め、全国人民のあいだにおける人民解放軍の威信を大いに高めた。われわれの軍隊は勇敢に戦う人民解放軍の名に恥じず、社会主義現代化建設を守る偉大な長城の名に恥じぬことが、この自衛反撃戦によつて立証された。

なお、とくに指摘しておくべきは、ここ二年あまり、われわれが外交面で多くの活動をすすめて

四つの現代化実現のために好ましい国際環境をかちとったことである。今回の自衛反撃戦をめぐる国際的な反響からすると、圧倒的多数の人は心からわれわれを支持していることがわかる。毛沢東同志が晩年にわれわれのために定めた三つの世界の区分〔三元〕についての戦略、中国は第三世界の側に立ち、第三世界諸国との団結をかためて、第二世界諸国を反覇権の共同闘争の側に立たせ、アメリカ、日本とも正常な外交関係を樹立するというこの政策決定はいかに英明で、卓見にとむものであったか、これはいまいよいよはつきり見てとれるようになった。世界人民と団結して、覇権主義に反対し、世界政治勢力の力関係を変えるためにも、また中国の国際的孤立化をねらうソ連覇権主義の狂気じみた計画を打破して、われわれの国際環境を改善し、われわれの国際的威信を高めるためにも、この国際戦略の原則ははかり知れぬ大きな役割を果たしている。

要するに、あらゆる面から見て、わが国の様相は、林彪、「四人組」のさばかりかえていた。当時に比べ根本的な変化をとげた。党中央の正しい指導のもとで、全党、全軍、全国各民族人民は、われわれの偉大な社会主義祖国の前途にふたたび希望と確信をもつようになってきている。すべてこの点を十分に評価しない者は、重大な誤りを犯すことになる。

とはいうものの、われわれにはまだ困難があり、しかも、一部の困難はかなりきびしいものである。この点を見落とすなら、これまた大きな誤りを犯すことになる。なによりもまず、林彪、「四人組」が長期にわたって破壊したわが国経済の現状について、冷静な判断をくだし、統一した見解をもたなくてはならない。ここ二十余年、われわれはずっと経済のひどいアンバランス

からぬけ出せなかったが、バランスのとれた発展がなければ、安定した確実な高速度の発展などはない。見うけるところ、わが国の経済、わが国の農業、工業、基本建設、交通、商業・貿易、財政・金融がさまざまな程度のアンバランスから比較的バランスのとれた状態へ移行するためには、全体的前進の過程で、もれなく、一定の調整期を置く必要がある。今度の調整は一九六〇年代初期のそれとは異なるものである。今度の調整は前進の過程での調整であり、四つの現代化実現のためにしっかりと基礎をきずくための調整である。だが、部分的な後退は必要であって、経済全体に害こそあれ利益の少ない一部の非現実的な高い目標は断固ひき下げなくてはならず、大きな欠損を出している、管理のよくない一部企業は、期限をきめて整頓するか、いっそのこと操業を停止して整頓しなくてはならない。一歩後退してこそ、二歩前進できるのである。なお、四つの現代化をより効果的に達成するためには、さまざまな経済体制の問題も真剣に解決しなければならず、これまた大がかりな複雑きわまる調整である。ことし、初年度の調整を立派に進めることができるなら、それはわれわれにとって大きな前進であり、活動の重点を切り換えるよいスタートとなるだろう。

経済のバランスが崩れたとき、決意を固めて必要かつ正確な調整をすすめることは、われわれの経済を正常な、安定した発展の軌道へ乗せる前提である。このことは、全国解放直後と一九六〇年代初期の二回にわたる調整〔三〕の歴史的経験によって十分に立証されている。したがって、こうした措置をとらなければ、よりよく前進できないこと、この調整の過程では、党と政府

の措置をかたく信じて、それに服従すべきであること、われわれはこの点を全国人民に説明しなくてはならない。今回の調整は一九六〇年代初期のそれに比べて、多くの有利な条件もあれば、一部の困難もあることを見ておく必要がある。当時の調整は、各級の指導力や党内党外の組織性、規律性といったものが現在よりもよく、いま、政治面、思想面で一部の不安定要因が残っているのとは異なっていた。いまは、林彪、「四人組」の十年にわたる攪乱によってもたらされた未解決問題と害毒が各地の大きな重荷となっている。林彪、「四人組」の流した害毒、わけても派閥性と無政府主義の害毒は、いま、社会主義、プロレタリアート独裁、党の指導、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想にたいする懐疑的な思潮と合流して、ごく一部の人のあいだに広がりをはじめている。われわれの一部の幹部は新しい歴史的任務に直面しながら、まだ思想の解放が不十分で、新しい状況の検討、新しい問題の解決に長じていない。そのうえ、小規模生産の習慣の力と官僚主義の習慣の力がいまだにわれわれにしつこくまつわりついている。このような状況のもとで影響面のひじょうに広い調整をするのだから、もしも強力な集中的指導と厳しい組織性、規律性がないなら、もしも社会の政治秩序安定の活動と教育を大々的に強めないなら、また、もしも党風の断固たる整頓をおこなわず、実事求是、大衆路線、刻苦奮闘といった党のすぐれた伝統をいっそう回復するのではないなら、もともと避けることのできた大小さまざまな騒動が起こって、われわれの現代化建設は第一歩で重大な障害に直面することとなる。これは、だれの目にも明らかなことである。このほど、中央は財政経済委員会を設けて、陳雲、李先念両同志

の主宰のもとに、全国の財政経済活動と当面の調整活動の統一管理をおこなうことを決定した。党中央と國務院および各地の指導機構は、民主を断固発揚するとともに、社会秩序の安定に力を入れ、社会主義法秩序を強め、安定・団結の局面を確保するため、これまでも一連の措置をとってきたが、今後もひきつづきそうした措置をとることになる。中央と各地の党の規律検査委員会がつぎつぎと成立しているが、その主要な任務は中央と各地の党委員会を補佐して、党風をよくすることにあり、われわれは前進途上の一時的な困難を乗りこえ、全党と全国人民を指導して現代化建設の勝利をかちとる十分な確信がある。

当面の時期と今後のかなり長い歴史的時期における主要な任務はどのようなものであろうか。一口に言えば、現代化建設をすすめることである。わが国の運命、わが民族の運命は、四つの現代化が実現できるかどうかにかかっている。中国の現実の条件のもとでは、社会主義の四つの現代化をりっぱにすすめることがマルクス主義を堅持することであり、毛沢東思想の偉大な旗じるしを高くかかげることである。四つの現代化にしっかり取り組むのでなく、この実際から出発しないのであれば、それはマルクス主義からの遊離であり、マルクス主義の空談義にすぎない。社会主義現代化建設はわれわれの最大の利益、もつとも根本的な利益を代表しているのだから、これはわれわれの当面の最大の政治である。いまは、共産党員の一人ひとり、青年団員の一人ひとり、そして祖国を愛する公民の一人ひとり、党と政府の統一指導のもとに、あらゆる困難をのりこえ、あらゆる方策を講じて、四つの現代化実現のために全力をささげなければならない。

二 四つの現代化を実現するには、 四つの基本原則を堅持しなければならない

今世紀末までに四つの現代化を実現し、わが国を社会主義の強国にきずきあげること、これはきわめて困難な任務である。

以前、民主主義革命に取りくんだときには、中国の実状に即して、農村から都市を包囲するという、毛沢東同志の切り開いた道を歩んだ。いま、建設をすすめるにも、中国の実状に即して、中国式の現代化の道を切り開かなければならない。

中国で四つの現代化を実現するには、少なくとも二つの重要な特徴を見ておくべきである。

一つは、基礎が弱いことである。帝国主義、封建主義、官僚資本主義の長期にわたる破壊によって、中国は立ち遅れた、貧しい国になってしまった。建国後、われわれの経済建設は偉大な成果をあげて、比較的とのった工業体系がつくりあげられ、多くの技術人材が養成された。解放いらい昨年にいたるわが国工業の年平均伸び率は、世界でもかなり高い方である。しかし、基礎があまりにも弱いので、中国はいまだに世界でも非常に貧しい国の一つである。中国は、科学技術の力が非常に乏しく、総じて科学技術の水準が世界の先進国より二、三十年は立ち遅れている。ここ三十年、わが国の経済は二回のもり上がりで二回の落ちこみを経た。とりわけ一九六六年から一九七六年にいたる十年は、林彪、「四人組」による国民経済の大破壊によって、深

刻きわまる事態に立ちいたった。いま、われわれが調整をすすめるのも、このゆゆしい後遺症をいちだんと取りのぞくためである。

もう一つは、人口が多くて、耕地が少ないことである。いま、全国の人口は九億をこえ、そのうち八〇パーセントは農民である。人が多いことは、有利な面もあるが、不利な面もある。生産があまり発達していない条件のもとでは、食生活、教育、就業がみな重大な問題となるのだ。われわれは計画生産を大いに進めてはいくが、何年かのうちに人口がこれ以上ふえないとしても、人口が多すぎるといふ問題は、一定の期間、なお存在しつづけるであろう。国土が広く、物産が豊富なことは、われわれのすぐれた条件である。だが、多くの資源はまだ探査しつくされてはならず、採掘、使用の段階にも入っていないので、まだ現実の生産手段にはなっていない。土地面積は大きい、耕地が非常に少ない。耕地が少なく、人口が多く、わけても農民が多いとなると、この状態を変えるのは容易なことではない。これが中国の現代化建設にあたって是非とも考慮せねばならぬ特徴である。

中国式の現代化は、中国の特徴から出発しなければならない。一例をあげると、現代化生産は、わりに少ない人数で十分だが、わが国の人口はこんなに多い。この兼ねあいをどうするかという問題がある。統一的に計画し、全般的に配慮しないと、われわれは長期にわたって就業十分という社会問題に直面することとなる。ここには問題が多いから、全党で実際活動にたずさわる同志も、理論関係の同志も共同で研究する必要がある。そうすれば、かならず適切な方法を

見つけだして、妥当な解決をみることができると。きょうは、この問題については述べないことにしよう。

きょう、話したいのは、思想面、政治面の問題である。党中央の考えによると、中国で四つの現代化を実現するには思想面、政治面で四つの基本原則を堅持しなければならない。これは、四つの現代化実現の根本的な前提である。この四つの基本原則とは――

第一、社会主義の道を堅持しなければならない、

第二、プロレタリアート独裁を堅持しなければならない、

第三、共産党の指導を堅持しなければならない、

第四、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を堅持しなければならない。

ご承知のように、この四つの原則は別に新しいものではなく、わが党が長期にわたり一貫して堅持してきたものである。「四人組」粉砕後、わけても三中総以降、党中央がとってきた一連の方針と政策は、一貫してこの四つの基本原則を堅持するものであった。

われわれは、「四人組」が極左のポーズをとって主張した、あのすべての人が貧しい生活を送るといふエセ社会主義にたいし、実践の面からも理論の面からも批判を加えた。われわれは、社会主義の共有制と、労働に応じた分配の原則を堅持した。われわれは、自力更生を主とし、外国の援助を従とする方針、外国の先進技術を学び、これを導入して、わが国の社会主義経済建設を發展させるといふ方針を堅持している。われわれは、客観的な経済法則にもとづいて事をはこぶ

ことに努めている。つまり、われわれは科学的な社会主義を堅持しているのである。

われわれは「四人組」の封建的ファシズムを粉砕し、多くの冤罪事件について名誉回復をおこない、歴史上のこされてきた一連の問題を処理し、プロレタリアート独裁をかため、社会主義の民主を復活、發展させた。とくに三中総以降は、毛沢東同志の長年の念願であった、生きいきとした活発な政治的局面が実現するようになった。

われわれは、これまで破壊されていた党の三大作風〔苦〕を復活させ、党の民主集中制を健全化し、全党の団結を強め、党と大衆との団結を強めた。これによって、党の威信は大いに高まり、国家と社会の生活にたいする党の指導は強まった。

われわれは林彪と「四人組」のつくり出した精神的なカセを粉砕して、指導者は神ではなくて人間であるという考え方を堅持し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の科学的体系を全面的かつ的確に把握することを堅持し、実際から出発し、实事求是の態度をとることを堅持した。こうして、毛沢東思想は本来の姿をとりもどし、中国の革命史と世界の革命史における偉大な革命家として、毛沢東同志の当然しめるべき崇高な地位は守られたのである。

それでも、中央はいまなおこの四つの基本原則の宣伝を大いに強調する必要があると考える。というのも、いま、一方では、党内の一部の同志が林彪、「四人組」の極左思潮の害毒にまだ深く染まったままであり、ごく少数の者はデマさえばらまいて、「四人組」粉砕後、わけても三中総後、中央の実施した一連の方針と政策をマルクス・レーニン主義、毛沢東思想にそむくものだ

と攻撃をかけているからである。また、他方では、社会のごく少数の者が、この四つの基本原則を疑うか、それに反対する思潮をまきちらしているのに、党内のごく少数の者はこの思潮の危険性を認めないばかりか、直接または間接的にある程度の支持さえ与えているからである。こうした人間は党内党外でごく少数を占めるにすぎないが、だからといって、かれらの役割を軽視することはできない。かれらはわれわれの事業にゆゆしい危害を及ぼす恐れがあるばかりか、現にその危害を及ぼしているということ、これはすでに事実の立証するところである。したがって、われわれは一方では、「四人組」の流した害毒をひきつづき断固一掃し、まだ中毒状態にある一部の同志に手をさしるべて目ざめさせるとともに、ごく少数の者のふりまく党中央誹謗の反動的言論には痛撃をあたえなければならず、他方では、上述の四つの基本原則にたいする懐疑的な思潮と断固闘争することに大きな努力をはらわなければならない。この二つの思潮はいずれも、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想にそむくものであり、われわれの社会主義現代化建設事業の前進をはばむものである。林彪、「四人組」のふりまいた極左思潮（言うまでもなく、この思潮も四つの基本原則に反対するものだが、ただ「左」の側から反対しているのである）にたいしては、これまで多くの批判をくわえてきたが、今後もひきつづき批判する必要がある、いささかも気をゆるめてはならない。だが、ここでとくに批判を加えたいのは、四つの基本原則に右の側から疑いをもつか、あるいはそれに反対するような思潮にたいしてである。

第一条、われわれは社会主義の道を堅持しなければならない。いま、社会主義は資本主義に及

ばない、というような言論をふりまく者がいる。そのような言論には、徹底的に反駁しなければならない。まず第一に、社会主義でなければ中国は救えないということ——これは、五・四運動から現在にいたる六十年の痛切な体験のなから中国人民がひき出した動かし得ぬ歴史的結論である。中国は社会主義から離れると、半封建・半植民地へ逆もどりするにきまっている。中国の圧倒的多数の人は、歴史の逆行を絶対許しはしない。第二に、経済、技術、文化などの面についてみると、社会主義中国は、いまはまだ発達した資本主義国に及ばないということ、これは事実である。だが、それは社会主義制度がもたらしたものではなく、根本からいえば、解放前の歴史がつくり出したもの、帝国主義と封建制がもたらしたものである。社会主義革命がなしとげられたことよって、わが国と発達した資本主義国との経済発展面の隔たりは大いに縮められている。われわれはあれこれの誤りを犯したにもかかわらず、ここ三十年間に旧中国の数百年、数千年では達成できなかったような進歩をなしとげた。われわれの経済建設の発展速度はかなり高いものである。われわれは、いまでは経験を総括し、誤りを是正しているので、将来、いかなる資本主義国よりも速い速度で発展し、しかも比較的安定した持続的な成長をつづけることは疑いがなく、もちろん、国民総生産一人あたりの額が発達した資本主義国のそれに追いつき、追いこすには、かなり長い時間を要するであろう。第三に、社会主義制度と資本主義制度のどちらがすぐれているかと言えば、社会主義制度がすぐれているのは当然である。社会主義国もある状況のもとでは大きな誤りを犯すことがあり、ひどい場合には林彪、「四人組」による破壊というよ

うな重大な挫折さえこうむることがある。もちろん、これには主観的な原因もあるが、根本的には旧社会の長い歴史が残した影響によるのである。そのような影響は一朝一夕にきれいきっぱり一掃されるものではない。封建制の長い歴史をもつ資本主義諸国、たとえばイギリス、フランス、ドイツ、日本、イタリアなども、その発展過程で大きな曲折と反復をくりかえしている（イギリス、フランスでは反革命の復活、ドイツ、日本、イタリアではファッショ支配が現われた）。だが、われわれは社会主義制度に依拠し、自分自身の力によって、かなり順調に林彪と「四人組」にうちかち、すみやかに全国を安定・団結と健全な発展の軌道へ乗せた。社会主義経済は共有制を基礎とするものであり、社会主義生産は搾取のためではなく、人民の物質的、文化的要求を最大限に満たすためのものである。社会主義制度にはこのような特徴があるため、わが国の人民は政治、経済、社会についての共通の理想をもち、共通の道德基準をもつことができる。これらは資本主義社会では永遠に見られないものである。資本主義では、どんなことがあっても、百万長者の超高額利潤から脱却できず、搾取と略奪から脱却できず、経済危機から脱却できず、また共通の理想と道德を形づくることもできず、さまざまな悪質きわまる犯罪、墮落、絶望から逃れることもできない。資本主義はすでに数百年の歴史をもっており、各国の人民が資本主義制度のもとで発展させてきた科学と技術、その積みあげてきたさまざまな有益な知識と経験はみなわれわれが受けつぎ、学びとるべきものである。われわれは、資本主義国の進んだ技術とその他われわれにとって有益なものを計画的、選択的に導入するが、資本主義制度を模倣、導入すると

か、さまざまな醜い、退廃的なものを模倣、導入するようなことは、決してしない。もしも発達した資本主義国が資本主義制度から脱却するならば、その経済と文化は疑いもなくいっそう大きな進歩をとげることができよう。それだから、資本主義国のなかでも、社会進歩を求めるすべての政治勢力は社会主義の研究と宣伝につとめており、資本主義社会のさまざまな不公平と不合理な現象をなくすため、さらには社会主義革命を実現するためにたたかっているのである。われわれは人民、わけても青年にたいして、資本主義国のなかの進歩したもの、有益なものを紹介し、資本主義国のなかの反動的なもの、腐敗したものを批判しなければならない。

第二条、われわれはプロレタリアート独裁を堅持しなければならない。プロレタリアート独裁とは、人民にとって社会主義の民主であり、労働者、農民、知識分子、その他の勤労者がともに享受する民主であり、歴史上もつとも広範な民主であるということ——この点についてはわれわれはすでに大量の宣伝を通じて説明してきた。だが、民主の実践面となると、われわれはこれまでに不十分なところがあり、誤りも犯してきた。林彪、「四人組」は「全面的独裁」などというものを宣伝し、人民にたいして封建的ファッショ独裁を實行したが、われわれはその独裁をすでに徹底的に粉碎した。かれらの独裁はプロレタリアート独裁とはいささかも共通点がないばかりか、まったく正反対のものである。現在、われわれはすでに過去の誤りを断固あらため、さまざまな措置をとって、ひきつづき党内民主と人民民主の拡大につとめている。民主主義がなければ、社会主義はありえず、社会主義的現代化もありえない。もちろん、民主化も現代化と同じよ

うに、一步一步すすめていくべきである。社会主義が発展すればするほど、民主主義も発展するのであって、これはいさきかも疑う余地がない。しかし、社会主義の民主を発展させるからといって、社会主義を敵視する勢力にたいしプロレタリアート独裁をおこなわなくてもよいというのでは決してない。われわれは階級闘争の拡大化には反対で、党内にブルジョアジーが存在するとは考えておらず、社会主義制度のもとで搾取階級と搾取の条件が確実に消滅されたのちにもブルジョアジーあるいはその他の搾取階級がまたもや生まれてくるなども考えていない。だが、社会主義社会にも、いままお反革命分子や特務分子がおり、社会主義の秩序をみだすさまざまな刑事犯罪分子やその他の悪質分子がおり、汚職、窃盗、投機活動をおこなう新しい搾取分子がいるのであって、こうした現象は長期にわたって完全には消滅できるものでないということ、この点も考慮しておかなければならない。かれらとの闘争はこれまでの歴史に見られたような階級対階級の闘争とは異なるが（かれらが公然とした、まとまった一つの階級になることはありえない）、それは依然として特殊な形態の階級闘争であり、言いかえれば歴史上の階級闘争が社会主義の条件下に特殊な形態をとって残ったものであり、これらすべての反社会主義分子にたいしては、依然として独裁を執行すべきである。それらの者への独裁をおこなわなければ、社会主義の民主もありえない。このような独裁は国内闘争であるが、一部は国際闘争でもあり、實際上、両者は切り離せない関係にある。したがって、階級闘争が存在する条件のもと、帝国主義や覇権主義が存在する条件のもとでは、国家の独裁機能の死滅など考えられず、常備軍、公安機関、裁判所、監

獄などの死滅も考えられないことである。それらの存在は、社会主義国の民主化とは矛盾しない。それらの正しい効果的な活動は、社会主義国の民主化を保証しこそすれ、その妨げとはならないのである。事実、プロレタリアート独裁がなければ、社会主義を守ることはできず、したがって、それを建設することも不可能なのである。

第三条、われわれは共産党の指導を堅持しなければならない。国際共産主義運動が生まれて以来、プロレタリア政党なくしては国際共産主義運動もありえない、ということが立証されてきた。十月革命いらい、共産党の指導なくしては、社会主義革命はありえず、プロレタリアート独裁はありえず、社会主義建設もありえない、ということがさらにはっきり立証されてきた。レーニンは、「プロレタリアートの独裁は、旧社会の諸勢力と伝統にたいする頑強な闘争であり、流血のものもそうでないものも、暴力的なものも平和的なものも、軍事的なものも経済的なものも、教育的なものも行政的なものもある。……闘争のなかできたえられた鋼鉄のような党がなく、その階級のすべての誠実な人から信頼されている党がなく、大衆の気持ちを注視し、大衆に影響をおよぼすことのできる党がなければ、このような闘争をすすめて成功させることは不可能である」(「三」と述べている。レーニンが述べたこの真理は、いまも生きている。中国では、五・四運動いらいの六十年を通じて、レーニンの指摘するような広範な動労大衆とつながりをもつ政党は、中国共産党以外にはまったく存在しなかった。中国共産党がなければ、社会主義の新中国もありえない。歴史の流れに逆行する林彪、「四人組」のやり方が全党のみならず、全国人

民の断固とした反抗をまねいたのは、多年の試練にたえて人民大衆と骨肉のつながりをきざずあげた中国共産党という指導者を足蹴にしたからにほかならない。また、「四人組」粉砕後、わけでも三中総以後、党の威信が全国人民のあいだで普遍的に高まっているのも、全国人民が前途にたいするそのすべての希望を党の指導に寄せているからにほかならない。一九七六年、天安門広場における周恩来総理追悼の大衆運動〔三〕は、党の組織的に指導したものでなかったにもかかわらず、やはり党の指導を断固支持して、「四人組」に反対した運動だった。この運動に参加した大衆の革命意識は多年にわたる党の教育とは切り離せず、かれらのうちの主な積極分子はほかでもなく共産党員と青年団員であった。したがって、天安門広場のあの大衆運動を、党の指導とは関係がなかった五・四運動のような純然たる自然発生的な運動と同一視してはならない。事実、中国共産党の指導を離れて、果たして誰が社会主義の経済、政治、軍事、文化を推進していくのか。果たして誰が中国の四つの現代化を推進するのか。こんにちの中国では、党の指導を離れて大衆の自然発生性を賛美するようなことを絶対にしてはならない。もちろん、党の指導に誤りは避けられないし、党がどうすれば大衆と緊密に結びつき、正しい、効果のある指導をおこなえるのか、これも真剣に考慮し、解決につとめるべき問題ではある。だが、だからといって、それは党の指導の弱体化や党の指導の解消をもとめる理由には絶対になり得ない。われわれの党はいく度も誤りを犯したが、われわれはそのつど党に依拠して自己の誤りを是正したのであり、党から離れて是正したのではなかった。いまの党中央は党内民主と人民民主をあくまで発揚し、こ

れまでに犯した誤りを断固是正している。それにもかかわらず、党の指導を弱め、さらには解消することを求めるなら、広範な大衆はなおさらそれを許さないだろう。事実、それは無政府主義をまねき、社会主義事業の崩壊と覆滅をまねくのみである。林彪、「四人組」は党委員会を足蹴にして、どんな「革命」をやったのか、これは誰の目にもあきらかである。こんにち、党委員会を足蹴にすれば、どんな「民主」になるのか、これも分かりきったことではないか。一九六六年というのは、もともと、中国経済が数年の調整を経て急速に発展した年であった。だが、林彪、「四人組」が騒ぎ出したため、経済はゆゆしい破壊をこうむった。いま、中国の経済は党中央と國務院の指導のもとで、ふたたび健全な発展の道を歩みつつある。もし、もういちど一部の者にほしいまま党委員会を足蹴にして騒ぎを起こさせるなら、四つの現代化はすっかり吹きとばされてしまうにちがいない。これは、おどかしではなく、多くの実践で立証された客観的な真理なのである。

第四条、われわれはマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を堅持しなければならない。林彪、「四人組」にたいするわれわれの闘争は、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想にたいするかれらの偽造、改ざん、分断に反対するのが、中心内容の一つであった。われわれが「四人組」を粉砕したことによって、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想は本来の科学的な姿をとりもどし、われわれの行動の指針となった。これは、全党と全国人民の偉大な勝利である。だが、ごく少数の者はこのようには考えていない。マルクス・レーニン主義の基本原則に公然と反対している者

もあれば、口先ではマルクス・レーニン主義を擁護すると言いながら、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の実践との結合である毛沢東思想に反対している者もいる。われわれはこれらすべての誤った思潮に反対しなければならぬ。一部の同志は、「正しい毛沢東思想」のみを擁護し、「誤った毛沢東思想」は擁護しないといっている。このような言い方も正しくない。われわれが堅持し、行動の指針としているのは、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の基本原則であり、言いかえればこれらの基本原理で構成される科学的体系である。個々の論断について言えば、マルクス、レーニン、毛沢東同志のいずれを問わず、あれこれの誤りを免れなかった。だが、それらはみなマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の基本原則で構成される科学的体系には入らないのである。

ここでは、おもに毛沢東思想について述べておこう。中国の反帝・反封建革命は無数の悲惨な失敗を重ねてきた。人類の四分の一を占める中国人民が正しい革命の道をさがしあて、一九四九年に全国の解放をかちとり、一九五六年に社会主義的改造を基本的になしとげたのは、毛沢東思想によるものではなかったろうか。これら一連の偉大な勝利は中国の運命を根本的に変えたばかりでなく、世界の情勢をも変えた。毛沢東思想は国際舞台において反覇権主義闘争と切り離しがたく結びついている。社会主義の旗じるしをかかげて覇権主義を実行すること、これこそ権力を握ったマルクス・レーニン主義政党が社会主義の原則を裏切ったことを示すもつともはつきりした目じるしである。すでに述べたように、毛沢東同志は晩年、三つの世界の区分についての戦略

思想を提起して、中米関係と中日関係の新段階をみずから切り開き、世界の反覇権闘争と世界政治の前途のために新しい発展条件をつくり出した。われわれが今日のような国際環境のなかで四つの現代化建設に取りくむことができるのも、毛沢東同志の功績によるものであることを銘記しないわけにはいかない。他のいかなる人物とも同じように、毛沢東同志にもかれなりの欠点や誤りがあった。だが、かれの偉大な生涯におけるこれらの誤りを、人民にたいするその不滅の貢献とどうして比較することができるか。かれの欠点と誤りを分析するさい、個人の責任を認めねばならぬのは当然だが、もつと大切なのは、歴史の複雑な背景を分析することである。そうしてこそはじめて、歴史や歴史上の人物にたいし、公正で科学的な態度、つまりマルクス主義的な態度をとることができるのだ。このような厳粛な問題について、もしもマルクス主義から離れる者がいるなら、党と大衆から非難されるにきまつている。それはなにも不思議なことではない。

毛沢東思想はこれまで中国革命の旗じるしであったが、これからも永遠に中国の社会主義事業と反覇権主義事業の旗じるしである。われわれは永遠に毛沢東思想の旗じるしを高くかかげて前進するであろう。

毛沢東同志の事業と思想は、かれ個人の事業と思想であるばかりでなく、かれの戦友、党、そして人民の事業と思想であり、半世紀以上にわたる中国人民の革命闘争の経験の結晶である。この点では、マルクスの場合と変わりが無い。エンゲルスはマルクスを評価したさい、現代のプロレタリアートは、マルクスによってはじめ、自己の地位と要求に目ざめ、自己の解放の条件に

目ざめたのだ、と述べている。これは果たして、個人が歴史を創造したという意味であろうか。歴史は人民が創造するものである。だが、だからといって、すぐれた人物にたいする人民の尊敬はいささかも否定されるものではないのだ。その尊敬が盲信ではなく、その人物を神と見なすことでもないのは、いうまでもない。

要するに、四つの現代化を実現するには、社会主義の道を堅持し、プロレタリアート独裁を堅持し、共産党の指導を堅持し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を堅持しなければならぬ。中央は、こんにち、この四つの基本原則の堅持をくりかえし強調する必要があると考える。なぜなら、一部の者（ごく少数であっても）がこれらの基本原則をぐらつかせようとしているからである。これは断じて許されない。党の思想・理論活動家は言うにおよばず、すべて共産黨員たるものは、この根本的な立場についていささかも動揺することを許されない。この四つの基本原則の一つでも動揺させるなら、社会主義事業全体、現代化建設事業全体を動揺させることになる。

中央のこのような問題提起は、大げさすぎるのではあるまいか。そんなことはない。事態の發展からして、党はこのように問題を提起しないわけにはゆかないのである。

最近の一時期、一部の地方では少数の者が騒ぎをおこしている。一部の悪質分子は、党と政府の責任者の指導、勧告、説明を受けられないばかりか、現段階では実現不可能な要求やまったく不合理な要求を持ち出し、一部の大衆を扇動し、使喚して、党・政府機関への突入、事務室の占

領、すわり込み・ハンスト、交通の遮断などをおこなわせ、業務の秩序、生産の秩序、社会の秩序をひどく破壊している。

そればかりではない。かれらは「飢餓反対」、「人権要求」など、人びとの耳目をおどろかすスローガンをかけて、一部の人をデモ行進に扇動し、外国人を通じてかれらの言論と行動を世界に広く宣伝しようとする。中国の人権グループなるものは、あろうことか大字報まで張り出して、アメリカの大統領にたいし、中国の人権問題に「関心」を寄せるよう求めた。外国人にたいし中国の内政への干渉を公然と求めるこの種の行為を、われわれは果たして許せるだろうか。「雪解け社」などというものもあって、プロレタリアート独裁に公然と反対する宣言を発表し、プロ独裁は人類を分裂させるものなどと言っている。憲法の原則に公然と反対するこの種の「言論の自由」を、われわれは果たして許せるだろうか。

上海には「民主討論会」というのがあって、一部の者が毛沢東同志を誹謗し、大きな反革命横断幕をかかげて、「諸悪の源はプロレタリアート独裁だ」、「中国共産党を断固、徹底的に批判せよ」などとわめき立てている。かれらによると、資本主義は社会主義よりもすぐれている。だから、中国はいま四つの現代化に取り組むのではなく、かれらの言う「社会改革」を実行し、資本主義のやり方を持ちこむべきだ、と言うのである。かれらは、自分たちの任務は「四人組」の解決しえなかった「走資派」の問題を解決することにあるなどと公言している。かれらのなかには、外国への「亡命」を求める者もあれば、国民党の特務機構とひそかに連係をとって、破壊活

動をくわだてている者もいる。

この連中があれやこれやの借口をつかって、われわれの活動重点の切り換えを破壊しようとしているのは、きわめて明らかである。もしもこのような重大事態を手をこまねいて見ているなら、われわれの各級党・政府機関は、かれらの妨害のために仕事ができなくなってしまい、四つの現代化に頭をつかう余裕などもなくなってしまう。

これらの事件はたしかにごく少数の者がやっていることで、圧倒的多数の人から反対されているが、しかし、嚴重に注意すべきである。第一、この連中は、ふつう、民主という看板をかかげているので、人びとの耳目をまどわしやうい。第二、この連中は、林彪、「四人組」の時代から残されてきた一部の社会問題を利用して、政府が一時、完全には解決できないような当面の困難をかかえている一部大衆は非常にだまされやすい。第三、この連中はさまざまな秘密組織または半公然組織をつくって、全国的な連絡をとりあう一方、台湾や国外の政治勢力と結託している。第四、この連中の一部の者は社会におけるならずもの組織や「四人組」の徒党と結託し始めて、その破壊活動の範囲を広げようとしている。第五、この連中はわれわれ一部の同志のあれこれの軽率な言論をとらえて、かれらの口実あるいは護身符にしようとしている。こうした状況は、この連中との闘争が簡単なものではなく、短期間には解決できないことを物語っている。われわれはよく働きかけて、だまされた者（多くは純真な青年である）をこれらの反革命分子、悪質分子から引き離すとともに、これらの反革命分子や悪質分子を法律にもとづいて嚴重に処分

しなければならぬ。なお、われわれは、全党の同志が警戒心を高め、大局に目をむけ、中央の指導のもとに一致団結して、この事態に対処するよう、教育を施さなければならない。ひきつづき思想を解放し、民主を發揚して、あらゆる積極的要素を動員する一方、一部の大衆、わけてもごく一部の青年における思想混乱の克服に努めること、これがその教育の内容である。

われわれは人民と青年にたいし、とくに民主の問題についてはっきり説明すべきである。社会主義の道、プロレタリアート独裁、共産党の指導、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想——これらはすべて民主の問題とかかわりがある。中国人民がこんにち必要とする民主とは、どのようなものなのか。中国人民がこんにち必要とする民主とは、もっぱら社会主義の民主、人民の民主のことであって、ブルジョアジーの個人主義的民主ではない。人民の民主は、敵にたいする独裁とは切り離せず、民主をふまえた集中とも切り離せない。われわれの実施する民主集中制とは、民主をふまえた集中と集中にみちびかれた民主との結合である。民主集中制は、社会主義制度の切り離せない一構成部分である。社会主義制度のもとでは、個人の利益は集団の利益にしたがい、局部の利益は全体の利益にしたがい、一時の利益は長期の利益にしたがう。つまり、小局は大局にしたがい、小さな道理は大きな道理にしたがうのである。われわれはこのような原則を提唱し、実行するが、それは個人の利益、局部の利益、一時の利益に留意しなくてもよいという意味では決してなく、社会主義制度のもとでは、結局のところ、個人の利益と集団の利益、局部の利益と全体の利益、一時の利益と長期の利益が統一したものだからである。われわれは統一的計

を置かなければならない。党の内外、上下を問わず、すべての人が大局に目を向けるようになってはじめて、われわれは首尾よく困難を克服し、四つの現代化の輝かしい前途をかちとることができるのである。逆に、四つの基本原則から逸脱して、抽象的に民主の空論をふりまわすなら、かならず極端な民主化と無政府主義の大氾濫をまねいて、安定・團結の政治的局面的徹底的な崩壊と四つの現代化の徹底的な失敗をまねくにちがいない。そうなれば、林彪、「四人組」にたいするわれわれの十年にわたる闘争は水泡に帰して、中国はふたたび混乱、分裂、後退、暗黒の状態におちいり、中国人民はすべての希望を失うことになる。これは、全国各民族人民が大きな関心を寄せているばかりでなく、中国の強化・発展を望む全世界のすべての人びと、さらにはただ対中国貿易の発展を望むにすぎない人たちまでが大きな関心を寄せている問題である。

ここでもう一つ、社会の気風についての問題を提起したい。建国後の十余年は、党と政府の正しい指導があったので、社会の気風は健全であった。党の教育を受けて成長した青少年は、圧倒的多数が崇高な理想をもち、社会主義の祖国を愛し、党と政府の呼びかけに積極的にかたえて、人民の利益を守り、社会秩序を維持し、いたるところで立派な献身的精神と規律順守の精神を発揮した。青少年のこのような気風は社会全体の気風と影響、促進しあい、全国人民と諸外国の人びとから賞賛されたものである。ところが、あの十年、林彪、「四人組」がわれわれの党と政府を攪乱し、われわれの社会をかき乱し、すくなくならぬ青少年にも害毒をあたえたので、社会主義の道徳と気風はひどく損なわれた。「四人組」粉碎後、事態は大いに好転したが、ある範囲では

画、全般的配慮という原則にもとづいて、さまざまな利益の相互関係を調整しなければならぬ。それとは反対に、集団の利益にそむいて個人の利益を求め、全体の利益にそむいて局部の利益を求め、長期の利益にそむいて一時の利益を求め、双方ともに損失をまねく結果になるのは必至である。民主と集中の関係、権利と義務の関係は、つまるところ、上に述べたさまざまな利益の相互関係が政治面または法律面にあらわれたものである。だからこそ、毛沢東同志は、われわれの目標は、集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば、個人の気持ちのびのびし、生きいきとして活発でもある政治的局面をつくることにある、と述べたのである。これが社会主義の民主の政治的局面であり、われわれが今後とも、実現に努めねばならぬ政治的局面なのである。

われわれはこれまで民主の宣伝、民主の実行が不十分で、制度のうえでも不完全なところが多かった。したがって、ひきつづき民主の発揚につとめることは、わが党の今後長期にわたるゆるぎない目標である。だが、民主について宣伝するさいには、かならず社会主義の民主をブルジョアジーの民主、個人主義的民主からきびしく区別し、人民にたいする民主と敵にたいする独裁とを結びつけ、民主と集中、民主と法秩序、民主と規律、民主と党の指導を結びつけなければならぬ。われわれは経済生活の面でいまなお一連の困難に直面しており、一連の調整、整頓、再編成を必要としている。このような時期には、個人の利益は集団の利益にしたがい、局部の利益は全体の利益にしたがい、一時の利益は長期の利益にしたがい、この道理の宣伝にとくに重点

かれらの害毒をいまなお見くびることができない。こうした状態は、全党の活動重点転換の要請とはきわめて不つり合ひである。われわれは、中国人と外国人との正常な交流を發展させることを提唱している。それは、わが国と各国人民との理解と友情を深めるために必要であり、国外からの技術と資金を導入するためにも必要であつて、このような交流はこれから日ましに多くなるであらう。しかし、少数の青少年にたいする教育と管理が不十分なため、やはり一部の不健康な傾向が現われている。一部の青年男女は資本主義国に盲目的な羨望をいだき、なかには外国人と接触のさい、祖国の尊厳や自己の人格さえかえりみない者が出てきている。このような状態にわれわれは真剣に注意しなくてはならない。われわれはぜひともわれわれの次の世代をりっぱに教育すべきであり、各方面から効果的な措置をとつて、われわれの社会の氣風をよくし、この氣風をひどく損なう悪質な行為に打撃を与えるべきである。

社会の氣風の刷新を促すには、まず党風をよくしなければならず、わけても党の各級指導者に率先垂範が要求される。党は社会全体の模範であり、党の各級指導者はまた全党の模範である。もしも党組織が大衆の意見や利害を放置し、それに見向きもしないなら、そのような党組織の指導部を信頼し、心から支持せよと、どうして大衆に要求することができよう。もしも党の指導的幹部じしんが自己をきびしく律せず、党の規律と国の法律を守らず、党の原則にそむき、派閥性をふりまわし、待遇の特殊化をむきぶり、裏口取引に走り、派手ごのみや浪費に明け暮れ、公益を損ねて私腹を肥やし、大衆と苦樂をともにせず、人に先んじて苦しみ、人に後れて楽しむとい

う生き方もせず、組織の決定にしたがわず、大衆の監督をうけいれず、はては自分を批判した者に打撃や報復をくわえるというこうした状態であれば、かれらが社会の氣風を改善するなどとうして期待することができようか。いまこの歴史的転換期には、解決すべき問題が山積し、さまざまな事業の振興が待たれており、党の指導を強め、党の作風を正しくすることが決定的な意義をもっている。毛沢東同志も、「わが党の作風が完全にまともなものになりさえすれば、全国人民はわれわれに見ならうようになる。党外にそうしたよくない氣風をもつ人がいても、善良な人であるかぎり、われわれに見ならつて、あやまりをあらためるようになるし、そうなれば、全民族に影響をあたえるようになる」(「三」と述べている。党風がよくなつてこそ、社会の氣風が好転し、四つの基本原則が堅持されるのである。

以上にのべたなかには、三中総の精神と食い違ふ点があるだろうか。ないと思う。すべて以上のべた点は、三中総のさまざまな方針・政策を貫徹するうえでぜひとも必要な措置である。くりかえして言うが、もしもこのような措置をとらないなら、三中総の方針と政策、活動重点の転換、四つの現代化建設、そして党内党外の民主生活の發展はみなご破算になってしまう。したがつて、いま一部の人が中央の方針は「しめつけ」に変わった、中央は民主を發揚する方針を変えた、などと言っているのは、まったく正しくない。わが党の一貫して貫いてきた四つの基本原則を堅持し、三中総の方針・政策の表現をさまざまにしようとするよくない傾向を断固克服してこそ、われわれは壮大な目標をめざし、確固とした足どりで前進することができるのである。

三 思想・理論活動の任務について

中央と省・市・自治区の理論活動座談会では多くの問題が提起されたが、ここでいちいち解答することはできない。きょうは思想・理論活動の任務について、つぎの二つの問題をとりあげてみよう。わたしは、状況の把握が不十分で、わけても地方の状況についてはいっそう把握が不十分だから、話すことが果たして完全に適切であるかどうか、この点はみなさんに考えていただきたい。

第一、当面の思想・理論活動にたいするいくつかの要求について。

マルクス主義の思想・理論活動は、現実の政治から離れられないものだ。わたしがここで言う政治とは、国内、国外の階級闘争の大局のことであり、中国人民と世界人民の現実の闘争における根本的な利害のことである。政治の大局から離れ、政治の大局を研究せず、革命闘争の現実の発展状況を判断せずに、マルクス主義の思想家、理論家になれるなどは、とうてい考えられない。もしもそんなことができるのなら、昨年、実践は真理を検証する基準であるという問題の討論に半年余りをついやしたことが何の意義もなくなってしまっているのではないか。科学的社会主義は実際の闘争のなかで発展していくのであり、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想も実際の闘争のなかで発展していくのである。われわれはもちろん、科学的社会主義から空想的社会主義へ後退しないし、マルクス主義を数十年前、あるいは百余年前の個々の論断の水準に足踏みさせておく

ようなこともしない。したがって、思想を解放するとは、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の基本的原理を運用して、新しい情勢を研究し、新しい問題を解決することである、とわれわれはくりかえし強調しているのである。

いま、わが国のもっとも重要な新しい情勢、もっとも重要な新しい問題とは何であろうか。言うまでもなく、四つの現代化を実現することであり、すでに述べたことばで言いかえると、中国式の現代化を実現するということである。すでに述べたことだが、中国の四つの現代化が直面する新しい状況、新しい問題をつつこんで研究し、大きな指導的意義をもつ答案を出すということ、これはわれわれの思想・理論活動家のマルクス主義にたいする大きな貢献となり、毛沢東思想の旗じるしをほんとうに高くかかげることとなる。だからといって、四つの現代化実現と直接かかわりのない思想・理論問題をつつこんで真剣に研究しなくてもよいなどというのでは決してないこと、これはもちろんである。哲学や社会科学でも、自然科学と同じように、基礎理論の研究を決して軽視してはならない。基礎理論の研究は、いかなる理論活動の大きな進歩にも不可欠なものである。

わたしはこの話の第二部で、四つの現代化実現のためには四つの基本原則を堅持しなければならぬと述べ、この原則の堅持はならぬ新しい問題ではないと、述べた。だが、これらの原則はいまの新しい情勢のもとではみな新しい意義をもつのであり、新しい豊富な事実によって、十分な説得力のある新しい論証を加えなければならない。そうしてはじめて、全国の人民、全国の青

年、全国の労働者、解放軍の全将士を教育できるのであり、こんにちの中国に真理を求める人た
ちを説得できるのである。これはきわめて重大な任務であって、重大な政治的任務でもあれば、
重大な理論的任務でもある。それは、うわべだけ書き変えて、中味は古い書物の丸うつしといっ
た仕事では決してつとまらず、革命思想家の心血をそそがねばなしとげられぬ、崇高な、創意性
にとむ科学活動なのである。林彪、「四人組」の十年にわたる攪乱によって、思想戦線には、長
いあいだでたらしめな屁理屈がはびこり、人びとは政治教育活動にたずさわる多くの幹部や教員を
信用しなくなってしまうた。これは政治教育関係者自身の誤りではない。いま、それらの同志
は、非常に悩んでおり、多くの父兄、古参の労働者、古参の戦士も非常に悩んでいる。これま
た、いま、ごく少数の敵対分子が風波を立てることのできる一つの重要な条件となっている。思
想・理論戦線の同志たちは早急に力を結集し、計画を立て、できるだけ短い期間に、新しい内
容、新しい思想、新しい言語をもちこんだ、読みごたえのある論文、書籍、読本、教科書をつぎ
つぎに書きあげ、それを出版して、空白を埋めなければならぬ。中央宣伝部がこの活動の指導
にあたるよう提案したい。また、たしかにすぐれた著作があれば、審査・評定ののち、党と国家
から賞金をあたえ、この平凡のようだが、実際には非常に骨の折れる仕事にたいし、しかるべき
榮譽を与えるよう提案したい。

四つの現代化は多くの分野にわたる複雑かつ重大な任務であるから、思想・理論活動家の任務
もその一部の基本原則を討論するだけにとどめてならないことは言うまでもない。われわれの前
には、基本理論、工業理論、農業理論、商業理論、管理の理論など、多くの経済理論問題が提起
されている。レーニンは、政治により少なく、経済により多く携わるように、と呼びかけたこと
がある。この二つの分野の理論活動の比率についていえば、レーニンのこの言葉は今日も通用す
ると思う。ただ、政治面ではもはや研究を要する問題がなくなったなどとは思わない。政治学、
法学、社会学や世界政治の研究を、多年、軽視してきたから、いま大急ぎでその補習をする必要
がある。われわれの大多数の思想・理論活動家は一つないしくつかの専攻科目を研さんし、外
国語を学べる者は外国語も学んで、外国の重要な社会科学の著作を楽に読めるようにならなけれ
ばならない。われわれは、自然科学が外国よりも遅れていることをすでに認めているが、いまは
社会科学の研究（比較可能な面について言うのだが）も外国より遅れていることを認めるべきで
ある。われわれの水準はまだまだ低い。多年ら、統計数字さえなかつたのだから、真剣に社会
科学を研究しようとする、当然、たいへんな困難につきあたる。したがって、われわれの思
想・理論活動家は急迫の決意をかためて、専攻分野に深くつっこみ、実際に深く入り、調査研究
をすすめる、自他の状況をよく知り、空論を戒めなければならぬ。四つの現代化は、空談義によ
って実現できるものではない。おごり高ぶり、古い殻にとじこもり、夜郎自大をきめこむとい
う、毛沢東同志の指摘した欠陥を、われわれの思想・理論活動家も極力、ましめるべきである。
立ちおくれを認めなければ、立ちおくれを克服することはできない。こうした立ちおくれの責任
は、まず中央と各級党委員会の思想・理論活動への指導方法がまちがって、タブーがあまり

にも多く、思想・理論活動への関心と支持があまりにも少なかったことにある。この点は指摘しておくべきであろう。ここで、中央を代表し、みなさんの前に自己批判をしておきたい。これからは、中央はじめ各級の党委員会が率先して思想・理論活動を正しい軌道にのせ、重要な位置に置かなくてはならない。わが党は、マルクス主義を指針とする大きな政党なのだ。もしもわれわれ自身がマルクス主義の研究を重視せず、実践の発展にもとづいてマルクス主義を発展させないなら、果たしてわれわれの仕事をつげにしなければならぬとできるだろうか。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の旗じるしを高くかかげるなどと唱えてみても、それは空談義になってしまふではないか。

第二、いくつかの理論問題にたいする見方について。

ここ数年カ月らい、理論活動家の討論の過程で多くの問題が提起されている。そのなかには、なおひきつづき研究を要する問題が多い。ここでは、解決をせまられているいくつかの問題についてだけ、ちょっとわたしの考え方をのべておこう。

(一) 社会主義社会の基本矛盾と現段階の主要矛盾について。基本矛盾については、いまのところ、毛沢東同志が『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』の論文でうち出した定式に拠るのが比較的良好だと思う。毛沢東同志は、「社会主義社会においても、基本的な矛盾は、やはり生産関係と生産力とのあいだの矛盾、上部構造と経済的土台とのあいだの矛盾である」と指摘している。そこで詳細に説明されているので、ここではくりかえさないことにしよう。もちろん

ん、これらの基本矛盾を指摘するだけでは、問題を完全に解決したことにはならないので、さらにつつこんだ具体的な研究をしなければならない。だが、ここ二十数年の実践に照らしてみると、この定式は他のいくつかのものよりも妥当だと思われる。では、当面の時期の主要矛盾、つまり、当面の時期に全党と全国人民が解決をせまられている主要問題あるいは中心任務は何かという問題だが、これは活動の重点を社会主義現代化建設に移すという三中総の決定があるので、実際には、すでに解決されている。われわれの生産力の発展水準はたいへん低く、まだまだ人民と国家の必要をみたすことができない。これが当面の時期におけるわれわれの主要矛盾であり、この主要矛盾を解決するのがわれわれの中心任務である。

(二) 社会主義社会の階級闘争について。この問題はさきにプロレタリアート独裁について述べたさい、若干ふれておいた。社会主義社会における階級闘争は客観的存在であって、軽視すべきでなく、誇張すべきでもない。軽視しても、誇張しても、大きな誤りを犯すことになるのは、実践の立証するところである。社会主義社会の全歴史的時期を通じて、ある種の階級闘争が存在するかどうかは、理論面、実践面の複雑かつ困難な多くの問題がふくまれており、先人の書物を引用するだけでは解決できるものではない。みなでひきつづき研究すべき問題だと思ふ。ともかく、社会主義社会における当面の時期と今後の階級闘争は、これまでの歴史上の階級社会における階級闘争とは明らかに異なるのであって、これまた客観的事実であり、否定するわけにはいかない。これを否定するなら、重大な誤りを犯すことになる。

(三)プロレタリアート独裁のもとでの継続革命について。こうした定式は、それが提起された当時の解釈、つまり、いわゆる「走資派から奪権する」——「党委員会を足蹴にして革命をやり、すべてを打倒するといった解釈をとるのなら、それが誤りであることはすでに実践によって立証されている。だが、新しい解釈をほどこすのであれば、党内でひきつづき研究してもよいと思う。

(四)党の第十一回大会〔老〕の路線にかかわる若干の定式について討論してもよいのかどうか。党の路線は党のすべての決議と同じく、実践の過程で検証されるべきものだということ、これは、毛沢東同志がいく度も語ったことのある道理である。党の代表大会である定式が採択されたからといって、それが正しいかどうかをまったく討議してはならないなどとは言えない。それがいけないのなら、つぎの代表大会で新しい定式を提起できるわけがない。党の各代表大会で決議しても、つぎの代表大会が開かれる前に、中央が実際状況の変化に応じて必要な修正を加えねばならなくなるということ、これはよくあることである。党の第十一回大会で定められた路線についても、実際状況の変化と実際状況にたいする認識の変化にもなつて、これまでの各中央委員会総会、わけても三中総において、必要な修正がいくらか加えられたが、今後必要修正はあるていど加えられよう。これはまったく正常なことである。ただ、党の規律によると、第十一回大会の路線の一部の定式にかかわる討議は、中央が正式に決定した場合をのぞくほかは、党の適当な会議に限るべきで、この範囲を逸脱してはならない。

要するに、思想・理論問題を研究、討論する場合には、百花斉放、百家争鳴の方針を断固実行しなければならず、揚げ足をとらない、レッテルを張らない、棍棒をふりまわさない、という「三つのことをやらない主義」の方針を断固実行しなければならず、思想を解放し、迷信を打破し、なにごとくも実際から出発するという方針を断固実行しなければならない。これらはすべて三中総で決定されたものである。改めて言明しておくが、これらの方針をゆるがすことはいささかも許されない。

同志のみなさん。いまこの時期は、わが党とわが国の歴史における重要な転換期である。わが党は全国人民を指導して、「四人組」のつくり出したかすかずの難関をみごと突破し、混乱していた国を秩序のある、進歩のめざましい国につくり変えた。四つの現代化実現という壮大な展望は、われわれの全党、全軍、全国各民族人民を鼓舞、激励し、その行く手をきし示している。広範な幹部、大衆はこの輝かしい未来のため、きそつてその力をつくしている。このような時期に、思想・理論活動の戦線における任務はとりわけ重大である。わが党の思想・理論活動の隊列は「四人組」粉砕後、大きな成果をあげ、三中総のあとにも重要な成果をあげている。これらの成果を十分に評価しないのは、すべて誤りである。だが、情勢は急速に発展しており、われわれの活動も急速に展開させる必要がある。今回のこの重要な会議によって、党の思想・理論活動家が情勢、任務、党の方針・政策および自己の仕事にたいする認識をさらに高め、党中央のまわりにつきそうかたく結集するとともに、みなさんのすばらしい仕事を通じて、全国各民族人民を中国

共産党のまわりには、いっそうかたく結集させてくださるよう、期待してやまない。三中総の方針をゆるぐことなく実行して、党の活動の重点を転換させ、あらゆる困難を克服し、四つの現代化実現の偉大な勝利をかちとるために、われわれは心を合わせて大いに奮闘しようではないか。

『建国いらいの党の若干の歴史的問題についての

決議』の起草に関する意見

(一九八〇年三月～一九八一年六月)

『建国いらいの党の若干の歴史的問題についての決議』の起草作業は、中央政治局と中央書記処の指導のもとに、鄧小平、胡耀邦両同志が主宰しておこなったものである。起草グループの直接の指導には、主として胡喬木同志があたった。一九八〇年三月から一九八一年六月の党の十一期六中総までのあいだに、鄧小平同志は決議草稿の起草と修正について何度も意見を述べた。以下にかかげるのは、そのうち九回にわたる談話の抄録である。

一

起草グループの要綱を見たが、間口を広げすぎた感じがする。叙述的な書き方は避けて、もっと要約すべきだ。重要問題については、論断を加えるべきで、断定的な言葉がもっとあってよい。もちろん、正確なものでなければならぬが。

決議の主旨は、三カ条とすべきである。

第一には、毛沢東同志の歴史的地位を確立し、毛沢東思想を堅持し、発展させること、これがもっとも核心的な一カ条である。今日だけではなく、今後とも、われわれは毛沢東思想の旗じる

東思想について述べるさいには、この時期の誤りにたいし、実際に即した分析を加えなければならぬ。

第二には、建国後三十年らしい歴史上の大きな問題のうち、どれが正しく、どれが誤っていたかについて、実際に即した分析を加えなければならない。一部の指導者の功績と誤りについて公正な評価を加えることも、そのなかに含まれる。

第三には、この決議を通じて、これまでの問題に基本的な総括を加えることである。以前にも述べたが、今度の総括は大まかにやった方がよく、細かくやらない方がよい。以前の問題を総括するのは、みな一致団結して前向き姿勢をとるよう、みちびくためである。決議が採択されたなら、党内でも、人民のあいだでも、思想をはっきりさせ、認識を一致させ、歴史上の重大問題についての論議に基本的に終止符が打たれるようにしなくてはならない。もちろん、以前の問題を論議することは、将来も完全には避けられない。だが、当面の仕事について討議するさいに、それと結びつけて以前の関連ある問題を論議するといふのでなくてはならない。いまは、ひたすら四つの現代化にとりくみ、一致団結して前向き姿勢をとるべき時である。だが、そうできるかどうか、それはそんなに容易なことではない。みな認識が一致し、二度と大きな食い違いが生じないよう、決議はできるだけよいものをつくるべきである。そうすれば、過去のことを論議するばあいにも、みな取りたてて言うほどの意見の相違はないと感ぜるであらうし、言うにしても決議の内容や過去の経験、教訓についての体得を語るだけになるであらう。

しを高くかかげなければならない。十一月五中総における劉少奇同志の名誉回復の決定が下部に伝達されてから、一部の人がびとあいだにはかなりの思想的な混乱が見られる。劉少奇同志の名誉回復は毛沢東思想にそむくものであると考えて、これに反対する者がいるかとおもうと、劉少奇同志の名誉が回復された以上、毛沢東思想の誤っていることは明らかになったと考える者もいる。この二つの考え方はどちらも誤っている。このような混乱した考えをはっきりさせなければならない。毛沢東同志と毛沢東思想をどう評価するかについては、党の内外、国の内外を問わず大きな関心もたれており、われわれがどんな態度をとるかを、全党の同志ばかりか、各界の友人がみな注目している。

毛沢東思想の歴史、毛沢東思想の形づくられた過程を書かなければならない。延安の時期は、毛沢東思想がわりあい全面的に形成された時期と言つてよい。毛沢東思想のなかでも、党建設の理論と党内関係の処理の原則をふくむ新民主主義革命の理論は、延安での整風の前後にわりあい整ったものとなった。六期七中総で採択された若干の歴史的問題についての決議は、主としては三回にわたる「左」よりの路線〔三〕を批判し、毛沢東同志に代表される正しい路線をそれと対照させたものであって、もっぱら毛沢東思想の全内容について論述したものではなかった。今回は毛沢東思想を正しく評価し、毛沢東思想の指導的地位を科学的に確立するのであるから、毛沢東思想の主な内容、わけても今後ひきつづき貫徹すべき内容を、わりあい概括的なことばで論述しなければならない。「文化大革命」の十年間、毛沢東同志は誤りを犯した。毛沢東同志と毛沢

全般的な要求、あるいは全般的な原則、全般的な指導思想とでもいうべきものは、以上の三条である。そのなかでも、もっとも重要で、もっとも根本的な、最大のカギとなるのはやはり第一条である。

ひとところ十回の路線闘争というのがよく口にされたが、いまはどう見るべきであろうか。

彭徳懐同志の「公」は路線闘争に入らないし、劉少奇同志の「公」も入らないから、これで二つ減ったことになる。林彪、江青は反革命集団である。陳独秀「六六」、それに瞿秋白「八二」同志、李立三「八七」同志を加えた三人は、陰謀術策をたくらんだわけではない。羅章竜「八八」は別個に中央をつくって、党を分裂させた。張国燾「八八」は陰謀術策をたくらんだ。高崗も同様である。林彪、江青ともなれば、言うまでもなからう。

高崗、饒漱石の問題を摘発したのは正しかった。これを路線闘争と言うべきかどうかは、検討の余地もあるが、その間の事情については、わたしがよく知っている。一九五三年末に毛沢東同志が中央を第一線と第二線に分けることを提案してから、高崗は非常に活発に動きまわった。まず林彪の支持をとりつけたので、あんなに大それたことをやる度胸がついたのだ。当時、東北地方は高崗自身の地盤で、中南地方には林彪、華東地方には饒漱石がいた。西南地方にたいしては抱きこみ策をとり、わたしのところへ正式に話をもちかけてきた。劉少奇同志は未熟だから、一緒に倒してかれを倒してしまおう、と言うのだ。そこで、わたしははっきりと態度を表明し、劉少奇同志の党内での地位は歴史的に形成されたもので、総じて言えば劉少奇同志はよい同志だ、

こうした歴史的に形成された地位を変えるのは適切でない、と答えてやった。高崗はまた陳雲同志にも話をもちかけ、副主席のポストをいくつか設けて、きみとぼくが一つずつではどうかなどと言った。こうなると、陳雲同志もわたしも問題は重大であると気づき、さっそく毛沢東同志に報告して、その注意をうながしたわけだ。高崗が劉少奇同志を倒そうとして取り引きをはじめ、陰謀術策をめぐらしたのは、まったく常軌を逸したやり方であった。したがって、高崗にたいする闘争はやはり肯定すべきである。高崗・饒漱石問題の処理はわりあい寛大であった。だれひとり傷つけることがなく、一部の幹部を意識的に守りさえした。要するに、この問題は摘発、処理しないわけにはいかなかったのだ。いまから見ても、あの処理は正しかったとおもう。だが、高崗はいったいどんな路線をうち出したというのか。わたしの見るところ、路線などというものは確かになかったのだから、路線闘争と呼ぶべきかどうかは疑問である。この点、諸君でもう一度考えてもらいたい。

一九五七年の反右派闘争「六」もやはり肯定すべきである。三大改造「七」が終わったあとには、反社会主義的な勢力と思潮、ブルジョア的な性格の勢力と思潮が確かにあったから、こうした思潮に反撃を加えるのは必要なことであった。これまでに何度も述べたことだが、あのころ、一部の者は確かに殺気だっていて、共産党の指導を否定し、社会主義の方向を変えようとしていた。それに反撃を加えなければ、われわれは前進することができなかつたのだ。誤りは、運動を拡大化したことにある。このほど統一戦線工作部では中央に報告を出し、まちがって右派のレッ

述べていた。わが国では、現代的工業の基礎と現代的農業の基礎をきずきあげなければならぬ。こうしてこそ、われわれの社会主義の経済制度と政治制度はわりあい十分な物質的土台を獲得したといえるのである。社会主義をきずきあげるためには、労働者階級は自分じんの技術幹部の隊列をもたなければならぬし、自分じんの教授、教員、科学者、新聞記者、文学者、芸術家、マルクス主義理論家の隊列をもたなければならぬ。それは壮大な隊列であるべきで、人数が少なくはだめである。われわれはまた、集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば個人の気持ちがのびのびし、生きいきとして活発でもある、という政治的局面をつくり出さなければならぬ——と。二回にわたる鄭州会議〔五〇〕も時宜になかったものであった。一九五九年の前半は、「左」の誤りを正していた時期である。廬山会議〔五〇〕の前期には、まだ経済活動についての討議もおこなっていた。だが、彭德懷同志の書簡が出ると、風向きが変わってしまった。彭德懷同志の意見は正しかったし、政治局委員として政治局主席に書簡を提出するのも正常なことであった。彭德懷同志にも欠点はあるが、彭德懷同志にたいする処分は完全に誤っていたのである。それからは、困難の時期に入った。一九六一年、書記処では、工業七十カ条〔五〇〕の制定、さらには工業問題についての決定を主宰した。当時、毛沢東同志は工業七十カ条にひじょうに満足し、これでわれわれにも章程ができた、とほめそやしたものだ。これ以前にも、農業十二カ条〔五〇〕、人民公社六十カ条〔五〇〕を制定した。その頃には、毛沢東同志もやはり「左」よりの誤りを真剣に是正しようと考えていたようである。七千人大会〔五〇〕で

テルを張りつけた者には名誉回復の措置をとり、そうでない者にはその措置をとらない、と言っている。だが、当時の決定に誤りがなかったも民主党派のいく人かの著名人についても、その結論に一筆書きそえ、反右派闘争のまえ、とくに民主主義革命の時期にはかれらも有益なことをしたと明記しておく必要がある。かれらの家族にたいしては一視同仁の態度をとり、生活の面、仕事の面、政治の面で適切な配慮を加えるべきである。

諸君の執筆要綱で、最後の数カ条の経験はよく書けているが、もう一、二カ条加えてもよいのではないか。

要するに、歴史上の問題については、大まかに、概括的にやるべきで、あまり細かにやる必要はない。一部の問題についての一部の同志の誤った意見にたいしては、ぐっともちこたえて頑張りとおさなければならぬ。重要な問題については、論証を加えるべきだ。なるべく早く草稿を出してもらいたい。

（一九八〇年三月十九日、中央の指導者との談話）

二

総じて言えば、一九五七年以前、毛沢東同志の指導は正しかったが、一九五七年の反右派闘争以後になると、誤りがますます多くなった。『十大関係について』はよかった。『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』もよかった。『一九五七年の夏季の情勢』では、次のようにも

うな印象をあたえてはいけない。これでは事実と合致しない。中央が誤りを犯した場合には、一人に責任を負わせるのではなく、集団が責任を負うべきである。この面では、マルクス・レーニン主義を運用し、われわれの実情と結びつけて分析を加えるべきで、なんらか寄与するところ、発展するところがなくてはならない。

要綱のなかの数カ条の経験についていえば、趣旨はよいが、問題はどこで述べるかということだろう。

全体の構成としては、まず序章があって建国以前の新民主主義革命の期間をふりかえってみる、これはあまり詳しく述べることはない。そのあとは建国後十七年、「文化大革命」、毛沢東思想についてそれぞれ一章ずつ、そして最後には結語ということであろうか。結語では、わが党はやはり偉大で、自己の誤りを直視する勇氣、是正する勇氣をもっていることを述べるべきだ。決議のもっとも核心的で、もっとも根本的な問題は、やはり毛沢東思想を堅持し、発展させることである。党の内外、国の内外を問わず、わが党がこの問題について論証と説明と概括をおこなうことを求めている。

(一九八〇年四月一日、中央の指導者との談話)

三

決議の草稿に目を通して見たが、だめだ。書きなおす必要がある。最初から言っておいたよう

の演説もよかった。だが、一九六二年七月、八月の北戴河会議〔六〕では、またもや逆もどりし、ふたたび階級闘争を、それももっと高い調子で蒸しかえすようになった。もちろん、毛沢東同志は八期中総の演説では、階級闘争を打ち出したからとて、経済調整の仕事に影響をおよぼしてはならないと述べた。これはこれでよい役割を果たした。だが、十中総以後になると、毛沢東同志自身がまたもや階級闘争に力を入れ、「四清運動」〔七〕に取りくんだ。その後は、文学・芸術問題についての二つの指示〔八〕のような、江青の例のしろものがつぎつぎと出てきた。一九六四年の末から一九六五年の初めにかけては、「四清運動」についての討議がおこなわれ、資本主義の道を歩む実権派というのがもち出されたばかりか、北京には二つの独立王国が存在するというのまでもち出された。ただし、一九六一年から一九六六年にいたる情勢の発展からは、調整の仕事がらうべきな成果をおさめたこと、経済の面でも政治の面でも情勢がよく、社会的秩序もきわめて安定していたことが見てとれる。要するに、建国後十七年の期間は、曲折もあり、誤りもあったが、基本的な面では正しかった。社会主義革命をうまくやりとげて、社会主義建設に入ってから、毛沢東同志にはよい文章があり、よい思想があったのだ。誤りについて述べる場合、毛沢東同志ひとりあげつらってはならない。中央の多くの指導者にもみな誤りはあった。たとえば「大躍進」〔九〕のさい、毛沢東同志はのぼせていたが、われわれはのぼせていなかったろうか。劉少奇同志、周恩来同志やわたしも反対はしなかったし、陳雲同志も何も言わなかった。このような問題では公平を期すべきで、一人だけが誤りを犯し、他の者はみな正しかったというよ

に、毛沢東同志の歴史的地位を確立し、毛沢東思想を堅持し、発展させる必要があるのに、この草稿では本来の構想がよく具体化されていない。一九五七年以前のいくつかの部分については、事実はほぼそんなところだろうが、叙述の方法、順序、とくに語調について再考し、筆を入れる必要がある。社会主義革命と社会主義建設について毛沢東同志はどのような貢献をしたのか、これを明確に述べなければならない。毛沢東思想はいつも発展の過程にある。われわれは毛沢東思想を回復し、毛沢東思想を堅持し、さらには毛沢東思想を発展させなければならないが、これらの面で、かれは一つの土台を提供したのだ。これらの考えを十分に書きあらわさなければならぬ。この期間におけるかれのいくつかの重要な文章、たとえば『十大関係について』『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』『一九五七年の夏季の情勢』などには触れておかなければならない。これらはわれわれが今後ひきつぎ堅持し、発展させるべきものである。われわれが毛沢東思想の旗じるしを高くかかげ、毛沢東思想を堅持するとは、いったい、どういうことを指すのか、読む者にはつきりしたイメージをあたえなければならない。

文書は全体に重苦しく、決議らしくない。かなり大幅に手を加える必要がある。毛沢東思想とはなにか、毛沢東同志の正しいところはどこか、ここに重点をおくべきである。誤ったところに批判も加えるが、それは適切でなくてはならない。毛沢東同志自身の誤りを述べただけでは、問題の解決にならない。もっとも大切なのは制度の問題である。毛沢東同志は多くのよいことを述べたが、これまで一部の制度がよくなかったので、逆の面に押しやられたのだ。晩年における

毛沢東同志の理論面、実践面の誤りは指摘しなければならないが、なるべく概括的に述べ、適切でなくてはならない。おもな内容としてはやはり正しい面を集中的に述べることだ。それが歴史に合致しているからである。毛沢東思想をわれわれがひきつぎ発展させることを結語に一度だけ書きいれたらどうか。ここでは、「二つのすべて」「三」の観点にも批判を加えなければならぬ。毛沢東同志の誤りは、自分の正しいものにそむいたところにある。「二つのすべて」の観点は、毛沢東同志の晩年の誤った思想をそっくりそのまま堅持しようとするものだ。既定の方針にしたがって事をはこぶ「允」というのは、毛沢東同志の晩年の誤った方針にしたがって事をはこぶということである。封建主義の残りかすの影響についても触れる必要があるが、これも適切でなくてはならない。毛沢東同志は、個人の功績や徳行の賛美には賛成しないと何度も述べ、地名や企業の名に個人の名前をかぶせるのはやめよう、誕生祝いや贈り物をするのはやめよう、と何度も提案した。現在のわが中央の堅持しているこうしたやり方は、毛沢東思想にもとづくものである。もちろん、われわれの具体化したものもあるにはあるが……。

(一九八〇年六月二十七日、中央の指導者との談話)

四

四千人の参加している今回の党内討議は、いまも進行中だ。いくつか速報に目を通して見たが、みな思うことを存分に述べ、さまざまな考え方が出ており、非常によい意見もある。いま討

議にかけている決議草稿はまだ長すぎるので、圧縮する必要がある。言わなくてもよいところは切り捨て、言うべきことはもっときわだたせるようにする。「四人組」粉砕後のことも書きたすべきだとの意見が、多くの組から出ている。この期間のことは、やはり書き加えるべきであろう。

毛沢東同志の功績と誤りにたいする評価や毛沢東思想について書くべきかどうか、書くとしてもどう書くのか、これはたしかに重要な問題である。わたしは警衛局の同志と話してみた。かれらによると、先ごろわたしがイタリアの記者フアラチに会ったときの談話を兵士たちに読んできかせ、討議させたところ、こんなふうには話せばわかりやすく、納得もいく、と幹部や兵士は言っているようである。もしも毛沢東思想を打ち出さず、毛沢東同志の功績と誤りを適切に評価しないなら、古参の労働者が承知せず、土地改革の頃の貧農、下層中農が承知せず、かれらと密接なつながりのある数多くの幹部も承知しないであろう。毛沢東思想というこの旗じるしを捨ててはならない。これを捨てる時、実質的には、わが党の輝かしい歴史を否定することになる。全般的に言って、わが党の歴史はやはり輝かしい歴史である。建国後の三十年をふくめ、わが党はその歴史を通じて、いくつもの大きな誤り、ひいては「文化大革命」を起こすというような大きな誤りさえ犯したが、何といつてもやはり革命を成功させたのである。世界における中国の地位は、中華人民共和国の成立後にはじめて大いに高まったのだ。世界人口のほぼ四分の一を占めるこの大国が地球上に立ちあがり、もちこたえることができたのは、中華人民共和国が成立したからで

ある。毛沢東同志も述べたように、中国人民はこのときから立ち上がったのである。国内の人民にしろ、国外の華僑にしろ、この点については、誰しもそれなりの体得があるにちがいない。また、全国的な統一（台湾以外）が真になしとげられたのも、中華人民共和国が成立してからである。旧中国の軍閥混戦期は言うにおよばず、国民党支配の時期でも、国が真に統一されたことはなかった。たとえば山西、広東、広西、四川などの地については、真の統一がおこなわれたとは言えない。もしも中国共産党がなく、新民主主義革命と社会主義革命がおこなわれず、社会主義制度がうち立てられなかったなら、わが国の様相はいまも旧中国のそれと変わらないものであったろう。われわれが現在のような成果をおさめたのは、中国共産党の指導、毛沢東同志の指導と切り離すことができない。ほかならぬこの問題で、われわれの多くの青年は認識に欠けている。

毛沢東同志にたいする評価、毛沢東思想についての論述は、たんに毛沢東同志個人にかかわる問題であるばかりか、わが党、わが国の全歴史とも切り離せない問題である。このような全局的観点がなくはならない。これは、決議の起草作業が始まったときから、くりかえし強調してきたことだ。決議の草稿には、毛沢東思想について論述した部分がなくてはならない。これは理論上の問題であるばかりでなく、わけても政治上の問題であり、国際国内の大きな政治上の問題である。この部分を書かないか、うまく書けないようなら、この決議全体を出さない方がよい。もちろん、どう書けばよいかについては、みな意見をよく検討しなければならぬ。

毛沢東思想はマルクス・レーニン主義を全面的に発展させたとか、マルクス主義の新しい段階であるとか、こういう提起をしなかったのは正しい。だが、毛沢東思想は中国におけるマルクス・レーニン主義の適用と発展であるということは、承認しなければならない。わが党は、中国の実際問題の解決にマルクス・レーニン主義を適用する過程で、たしかに大きな発展をとげた。これは客観的な存在であり、歴史上の事実である。どう書くにせよ、毛沢東同志の功績と誤り、毛沢東思想の内容、また、われわれの当面の仕事や今後の仕事にたいする毛沢東思想の指導的役割については、はっきり書いておかなければならない。三中総以後、われわれは毛沢東同志のあの正しい面を回復したのではないか、毛沢東思想を的確かつ全面的に学習し、運用したのではないか。基本はやはり、あの幾つかの点であろう。いろいろな面から言って、いま、われわれのなすべきことは、毛沢東同志がすでに提起はしたがまだ手をつけていなかったことに取りくみ、かれが誤って反対したものを改めて元にもどし、かれがうまくやれなかったことを立派になしとげることである。今後かなりの期間は、やはりこの仕事に取りくむのである。もちろん、われわれも発展させたいし、ひきつづき発展させてゆかなければならない。

第七回党大会〔二〇〕では、毛沢東思想を全党の指導思想と定めた。まるまる一世代の人たちを毛沢東思想で教育したから、わが党は革命戦争の勝利をかちとり、中華人民共和国をうち立てることができたのだ。「文化大革命」はたしかに大きな誤りであった。だが、わが党はやはり林彪、「四人組」という二つの反革命集団を粉碎して、「文化大革命」に終止符をうち、今日まで発

展してきた。これらの事柄はやはり、毛沢東思想で教育された世代の人たちがなしとげたのであるまいか。われわれのいう混乱收拾とは、林彪、「四人組」の破壊による混乱を收拾し、毛沢東同志の晩年の誤りを批判して、毛沢東思想の正しい軌道に戻ることである。要するに、実践の検証を経て、その正しさが立証された毛沢東思想、今後のわれわれの仕事の指針とすべき毛沢東思想を、もしもわれわれの決議に書きこまないなら、われわれのこれまでの革命と建設、今後すすめる革命と建設は、その重みと歴史的意義が弱まるにちがいない。毛沢東思想を決議に書きこまなかったり、あるいは堅持しなかったりするなら、われわれは歴史的な大きな誤りを犯すことになる。

いま、一部の同志は多くの問題を毛沢東同志の個人的品性になすりつけている。実際には、個人的な品性では説明のつかない問題も少なくないのだ。品性のすぐれた人でも、ある状況のもとでは、誤りを避けることができない。赤軍のころ、中央革命根拠地でA B団を鎮圧したが、打撃を加えた者はみな品性が劣っていたのだろうか。A B団に打撃を加えた当初は、毛沢東同志も参加していた。ただ、毛沢東同志はほかの誰よりも早く気づき、問題を発見して、経験と教訓を総括し、延安に着いてからは、「一人も殺さず、大部分の人を逮捕しない」〔二〇〕という方針を提起したのだ。あのような異常に緊迫した戦争の環境では、内部にもぐりこんだ悪人を見つけ出し、警戒心を高めるのは、必要なことである。だが、かっとなって、よく分析もせず、供述ひとつで信じこんでしまうのでは、誤りをまぬがれない。客観的には、環境が緊迫していたのも確か

である。だが、主観的には、経験がないという問題も当然であったのである。

毛沢東同志は、「文化大革命」のときにも、すべての古参幹部を打倒しようとしたわけではなかった。たとえば賀竜〔三三〕同志のばあい、林彪は最初からやっつけるつもりだったが、毛沢東同志は確かにかばおうと思っていた。自分の言うことをきかない者がいたら、やっつけようとはしたが、どの程度までやっつけるかについては、毛沢東同志にも考えはあった。後になって、やっつけ方がますますひどくなった点では、かれに責任がなかったとは言えないが、すべてを毛沢東同志ひとりの責任にするわけにもいかない。一部は林彪、「四人組」が既成事実をつくりあげてしまったのであり、一部はかれらが毛沢東同志にかくれてやったのである。だが、いずれにせよ、数多くの幹部が打倒されたのは、毛沢東同志晩年の最大の悲劇であったと言わざるをえない。

晩年の毛沢東同志はたしかに思考の一貫性を欠き、相互に矛盾したことも言った。たとえば「文化大革命」について、誤り三分、成果七分と評価し、三分の誤りとは一切打倒、全面内戦のことだと言った。この八字と七分の成果とは、どうしてつながるだろうか。

毛沢東同志の誤りも含め、誤りにたいしては、かならず手加減せずに批判を加えるべきである。だが、かならず実事求是の態度で、各種の異なった状況を分析すべきであり、すべての問題を個人の品性になすりつけてはならない。毛沢東同志は孤立した人間ではなく、亡くなるまでわが党の指導者であった。毛沢東同志の誤りを書きすぎてはならない。書きすぎると、毛沢東同志

の顔に泥を塗ることになり、わが党、わが国の体面に泥を塗ることになる。これは歴史の事実に戻す。

五

(一九八〇年十月二十五日、中央の指導者との談話)

決議の草稿の輪郭は、これでよいと思う。

建国直後七年間の成果は、みな一致して認めているところだ。われわれの社会主義的改造は成功したのであり、大したものである。これは、マルクス・レーニン主義にたいする毛沢東同志の大きな貢献である。こんにち、われわれはこれを理論的にも説明する必要がある。もちろん、欠点もある。仕事の面からみると、ある時期、一部の問題であせりすぎたことがそれだ。

「文化大革命」以前の十年は肯定すべきである。全般的にうまくいっており、基本的には健全な道にそって発展した。その間、曲折もあり、誤りも犯しはしたが、成果が主要なものである。その頃、党と大衆は心がかよいていて、大衆のなかでの党の信望はわりあい厚く、社会の気風もよく、広範な幹部と大衆は意気こみに燃えていた。だから、困難につきあっても、かなり順調に乗りこえることができた。経済面では問題もあったが、全般的には発展した。成果を十分に確認すると同時に、反右派闘争、「大躍進」、廬山会議の誤りにも触れておかなければならない。総じて、われわれは経験が足りず、当然のことだが、勝利したために慎重さにも欠けてい

のだ。六十年を書けば、毛沢東同志の功績と貢献がより全面的に総括され、毛沢東同志の歴史的地位の確立、毛沢東思想の堅持と発展のためにも全面的な根拠ができる。たいへんよい意見だから、起草グループに伝えてもらいたい。もうひとつは、中央が学習を提唱するようにという提言である。おもにマルクス主義哲学を学習し、毛沢東同志の哲学著作に重点を置くという提言である。陳雲同志の話によると、毛沢東同志の哲学著作を学んで、大いに得るところがあったそうだ。毛沢東同志が、哲学を学ぶよう三回もすすめてくれたので、延安のころ、毛沢東同志の著作をひととおり真剣に読んだが、後の仕事に大いに役立ったという。いま、われわれの幹部のなかには、哲学の分からない人がたくさんいるので、思考方法、活動方法の面で一歩高める必要があるにがある。『実践論』『矛盾論』『持久戦について』『戦争と戦略の問題』『連合政府について』などの著作を選んで編集すればよい。そのほか、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作からも選ぶ必要がある。要するに、マルクス主義哲学を学ぶ必要があるといふことだ。歴史も少し学ばなくてはならない。青年はわれわれの歴史、とくに中国革命、中国共産党の歴史を知らない。これらの意見を胡耀邦同志に伝えてもらいたい。歴史的問題の決議のなかでは、マルクス主義哲学にたいする毛沢東同志の寄与についての叙述をもっと豊富で、もっと充実したものにしてもらいたい。結語のなかにも、学習の提唱という趣旨を加える必要がある。

(一九八一年三月二十六日、『歴史決議』起草グループの責任者との談話)

た。もちろん、毛沢東同志が主な責任を負わなくてはならない。この点については、毛沢東同志も責任を感じて、自己批判をしたことがある。これらのことをはっきり述べてから、「左」の思想の発展、さらにはその帰結としての「文化大革命」の勃発に書きおよぶことである。「文化大革命」の部分は概括的に書かなければならない。胡喬木同志の意見には、わたしも賛成である。「文化大革命」は、それ以前の十七年の誤りよりも深刻で、全局的な誤りであった。それはきわめて重大な結果をもたらした。いまだに影響をおよぼしている。「文化大革命」は一世代の人を台なしにしたというが、実際には一世代にとどまらない。無政府主義や極端な個人主義を氾濫させ、社会の気風をひどく損なった。とはいえ、この十年間にも、健全な面はあった。いわゆる「二月逆流」〔三〕は逆の流れではなくて、正しい流れであり、林彪、「四人組」とくりかえし闘争したものではないか。

胡耀邦同志は、決議の草稿ができたなら、黄克誠、李維漢らの諸同志を含む年配の幹部や政治家の意見をよくたずねるべきだと主張した。まったく正しい意見で、わたしも賛成である。

(一九八一年三月十八日、『歴史決議』起草グループの責任者との談話)

六

一昨日、陳雲同志を訪ねた。陳雲同志は決議の修正稿について、また二つ意見を出してくれた。ひとつは、別に一章を設けて、解放前の党の歴史と党の六十年について述べるべきだとい

決議の草稿については、すでに何回か討議をした。そのさい、いろいろよい意見が出ているので、それは取り入れるべきだ。だが、一部の意見は受け入れるわけにはいかない。たとえば、八期十二中総と第九回党大会〔八〕は非合法だという意見がそれである。もしも八期十二中総と第九回党大会の合法性が否定されるなら、「文化大革命」の期間にも党は存在し、国務院と人民解放軍は必要な仕事をたくさんしたというわれわれの言い方は成り立たなくなる。八期十二中総のとき、周恩来同志はこんなふうの説明した——十名の中央委員が亡くなったので、中央委員候補のなかから十名を補い、出席した中央委員は五十名となった、これで過半数に達している、と。合法性とは、このことを指すのだ。一九三一年の上海の臨時中央と、そのご臨時中央の招集した六期五中総とが合法であるかどうかについて、延安のころ毛沢東同志の下した決定〔二〇〕にもとづけば（これはすぐれた決定である）、八期十二中総にしろ、第九回党大会にしろ、それを非合法というのは適切でない。「文化大革命」のとき、党は存在しなかった、などと言う同志もいるが、そうは言えない。党の組織生活は、ある期間、停止したが、党は実際には存在していた。でなければ、なぜ一発の弾丸も撃たず、一滴の血も流さずに、「四人組」を粉砕できたのか。「文化大革命」のあいだにも、党はやはり存在したのだ。いまも八期十二中総と第九回党大会の合法性を否定するなら、わが党は、ある期間、存在しなかったことになるが、これは実情に合致しない。

「文化大革命」の期間、対外活動は大きな成果をおさめた。国内は動乱の状態でも、中国の大国としての地位は国際的に認められ、中国の国際的地位は高まったのだ。一九七一年七月、キッシンジャー〔二一〕が中国を訪問した。同年十月には、国連の三分の二以上の国が国連における中華人民共和国の合法的地位の回復に賛成票を投じ、アメリカは面目丸つぶれとなった。一九七二年二月、ニクソン〔二二〕が中国を訪問し、上海コミュニケに署名した。九月、中日間の外交関係が回復した。そして一九七四年の四月には、国連の第六回特別総会に出席したわたくしが中国政府を代表して演説し、熱烈な歓迎を受けた。演説を終えると、多くの国の代表がかけよってきて、かたい握手をかわしたものだ。これらはみな実際にあったことである。

（一九八一年四月七日、『歴史決議』起草グループの責任者との談話）

この文章は、起草を始めてから、かれこれ一年あまりになるが、いくど稿を改めたか分からないくらいだ。一九八〇年十月に四千人が討議に参加し、多くの重要な、よい意見を出してくれた。この四千人の討議と最近の四十名あまりの同志の討議をふまえて、また何度も手を入れた。起草グループの二十数名の同志はずいぶん骨を折ったすえ、いまこの草稿を出してくれたのである。

この決議については、かつて一部の同志から、それほど急いで出すこともないのではないかと
いう意見が出されたこともある。そうはいかない。みなが待っているのだ。国内では、党内、党
外を問わず待っている。ともかく何か出さないと、重大問題についての統一した見解がないこと
になる。国際的にも待たれている。みなが中国に目を向け、われわれの安定・団結の局面に疑い
をもっている。この文書が出せるか出せないか、出せるとしても早くなるか遅くなるか、こうし
た点も注目されているのだ。だから、これ以上延ばすわけにはいかない。延ばせば、不利であ
る。もちろん、よい草稿が欲しい。わたしの見るところ、いまの草稿は少なくとも一つのよいた
たき台にはなるだろう。この草稿は、最初に出された三つの基本的要請にもとづいて書かれてい
る。いまの草稿は三つの基本的要請に合致していると思う。

なるだけ早く発表するには、もういちど四千人の討議にかけるようなことはできないし、その
必要もない。四千人の意見はもう十分に出されたし、いまの修正稿にはその意見も十分にとり入
れられているからだ。これからの手順は、政治局拡大会議を開き、七十数名がもう少し時間をか
け、精力を投じ、草稿をもっときめ細かに推敲し、もつとりっぱに練りあげて、決定稿とし、そ
れを六中総に提出することである。党の六十周年に発表する予定でやればよい。党の六十周年記
念には別に他の文章を発表する必要はなからう。記念的性格のものは必要だが、主体はこの文書
の発表である。

欠点とは言えば、ちょっと長すぎることだ。なんとしても二万字以内におさえるつもりだった

が、最後には二万五千字をメドとするようになり、いまは二万八千字にふくれてしまった。三、
四千字の超過はどうということもないので、無理して縮めることもなからう。もちろん、討議の
過程でどこか縮められたら、それに越したことはない。

この文書は、四千人の討議と最近の四十名あまりの同志の討議をふまえた修正稿なので、多く
のよい意見がとり入れられている。たとえば、冒頭に建国以前の二十八年を加えるという陳雲同
志の意見がそれだ。これはひじょうに重要な意見で、いまは序章が置かれている。そのほかにも
数多くの重要な意見があり、ご覧になれば皆さんの意見にもとづく修正なのか、お分かり
のほすである。当然のことだが、一部の意見はとり入れられなかった。

要するに、中心になるのは二つの問題である。ひとつは、毛沢東同志は功績が第一なのか、誤
りが第一なのか。第二は、われわれの三十二年、とくに「文化大革命」前の十年は、成果が主要
なのか、誤りが主要なのか。暗黒が主要なのか、それとも光明が主要なのか。なお、このほかにも
も、これらの誤りは毛沢東同志ひとりものか、ほかの人にも責任があるのかという第三の問題
がある。決議の草稿では、わが党中央は責任を負わねばならず、ほかの同志もいくらかの責任を
負わねばならないという点に、あちこちでふれている。これで、かなり実状に合致したものに
なると思う。なお第四点について言えば、毛沢東同志は誤りを犯しはしたが、これは偉大な革命家
の犯した誤りであり、偉大なマルクス主義者の犯した誤りであるということだ。

全般的にみて、この決議はりっぱな決議であり、いまの草稿はよくできた草稿である。もともと、この決議では、毛沢東思想の偉大な旗じるしをかかげて、「文化大革命」と毛沢東同志の功績および誤りにたいし、実事求是の態度で適切な評価をあたえる、そして、一九四五年あの歴史的問題の決議が果たしたような役割をこの決議にも果たさせる——これが当初の構想であった。つまり、経験を総括し、思想を統一し、一致団結して前向き姿勢をとる、ということである。いまの草稿はこの要請にこたえていると思う。

この決議を書きあげるのに一年あまりかかった。その間、四千人の討議があり、その後も数十人の討議と政治局拡大会議での討議をやったから、いまの六中総の予備会議での討議は四回目ということになる。わたしの見るところ、討議は真剣で厳肅、しかもかなりきめ細かくおこなわれた。

核心となるのは毛沢東同志への評価であるが、草稿の評価の程度は適切である。たとえば、毛沢東同志の誤りを路線の誤りとして提起するかどうか、ここには程度の問題がある。われわれが路線の誤りとして提起しなかったのは、これまで路線闘争とか路線の誤りという提起の仕方が的確でなく、ややもすれば濫用され、混乱していたことを考慮したからである。これまでは、党の歴史における何回の路線闘争などとよく言ったものだが、いまから見れば、明らかに路線闘争と

しては成りたらず、根本的に否定すべきものが、二つある。劉少奇、彭真、羅瑞卿、陸定一、楊尚昆〔ヨウ〕の場合と、彭德懷、黄克誠、張聞天、周小舟〔ショウ〕の場合がそれである。高崗・饒漱石の事件のばあい、基本的な結論は変わらないが、路線闘争とは言えないだろう。羅章竜が路線の誤りを犯したというのも、実をいうと当たっていない。羅章竜は派閥闘争をやり、党を分裂させ、別個に中央をつくったのだ。高崗・饒漱石の事件もこれに似た性格のものだが、もちろん、別に中央をつくるどころまではゆかなかった。瞿秋白の誤りは半年たらず、李立三にいたってはわずか三ヵ月だ。歴史上の路線闘争についてのこれまでの評価は的確ではなかった。これがわれわれの、路線闘争を提起しない理由の一つである。いまひとつの理由は、これまで党内では長いあいだ、少しでも異なった意見を述べると、すぐ路線闘争の次元に引きあげられ、路線の誤りとして批判されたことである。したがって、この問題には慎重に対処しなければならぬ。これは、わが党の党風を改める問題である。第十一次党大会〔ヒ〕については、路線の誤りなどと言わない方がよい。「文化大革命」についても、路線の誤りとは言わず、実質にそくして分析し、あるがままに叙述することである。事実、「文化大革命」の誤りの性格について、この決議はいわゆる路線の誤りというこれまでの概念を越えた分析をおこなっている。もちろん、路線闘争を提起しなくなったからといって、路線の二字をいっさい使ってはならないというわけではない。たとえば、三中総で正しい思想路線、政治路線、組織路線が確立されたというような提起の仕方は、今後もやってよい。路線ばかりか、総路線というのを使ってもよく、現にわれわれは四つの現

代化の実現を新しい時期の総路線と言っている。この決議でも路線の二字は用いており、使っていないわけではない。場合によっては、路線の二字で言いあらわした方がすんなりと、自然に受けとられ、すぐ分かることもある。だが、党内闘争の場合には、あるがままにその性格を規定し、あるがままにその誤り、その内容を述べるべきで、原則的にはもう路線闘争などとは言わないことにしたい。この決議を先例として、今後ともこのように処理する。これが第一点だ。

第二点は、なぜ適切ということを強調する必要があるのか。このところ、毛沢東同志の一部の問題をめぐる論議には、言い過ぎのところがあった。これは改めるべきである。こうする方が実に合致するし、国家全体、党全体のイメージという点でも有利である。過去の一部の問題については、もちろん、おもな責任は毛沢東同志にあるとしても、いくらかの責任は集団が負わなければならぬ。われわれに言わせると、決定的な要素は制度であり、あのとときの制度はそうなっていたのである。当時は、なにもかも功績を一人のものにしていった。一部の問題については、われわれも確かに反対しなかったのだから、いくらかの責任を負わなければならない。もちろん、あのような条件のもとでは、反対するのも困難というのが実情であった。だが、「われわれ」を回避してはならない。われわれがこの責任をとっても損をすることはなく、かえってためになる。教訓を汲みとれるからだ。ただし、これは中央の指導の角度から言ったもので、地方には責任がない。わたしと陳雲同志は政治局常務委員のポストにあったから、少なくともわれわれ二人には責任がある。中央の指導的地位にあった他の同志も、いくらかの責任は負うべきだろう。こ

れは実状に合致するだろうか。やはり合致するのである。こうすれば、道理も通るし、益するところも大きい。毛沢東同志への評価について、最初に実事求是であるべきだと言いつつ、後で適切であるべきだということをつけ加えたのは、この意味である。

第三点は、討議の過程で「四人組」粉砕後の二年間のことにふれたさい、ある同志から提起された問題だが、華国鋒同志の名前を出すべきかどうかということである。みなであれこれ考えた結果、名前を出さぬわけにはいくまいということになった。この決議は、去年十一月の政治局会議の通達〔一九七〇〕とかみ合わなければならぬ。今回の決議の草稿では、通達よりもずっとおだやかで、やわらかな言葉づかいになっており、いくらか重みも減っていて、この方がよいと思う。なぜなのか。あれは政治局会議の決議だが、これは若干の歴史的問題についての決議だからだ。この決議は歴史に残る文書である。もちろん、政治局の文書として歴史に残るが、この歴史的問題についての決議の方はより厳粛な文書なので、表現にいつそう手加減を加えても損はしない。とはいえ、事実が事実として、華国鋒同志の名はやはり挙げておくべきである。もしも名指しをしないなら、華国鋒同志の仕事は換えた理由が無くなるではないか。まず、これが問題である。政治局の決議は正しかったのかどうか、華国鋒同志の仕事は換えるべきであったのかどうか、この問題に答えなくてはならない。同時に、現在の政治的な動きから言っても、名指しはやはり必要である。すでに周知のことだが、いま、「四人組」の残党と一部の下心のある連中は誰の旗じるしをかかげているのか。かつては「四人組」の旗じるしだったが、いまは誰の旗じるし

なのか。華国鋒の旗じるしをかかげ、華国鋒を支持しているのだ。これは大いに注意すべき動きである。もちろん、はっきり言っておかねばならないし、すでに多くの同志にも話したことだが、これらの問題については華国鋒同志個人に責任はなく、かれ自身はなんらの活動にも加わってはいない。だが、社会におけるこの動きは注意に価するものである。そんなわけで、われわれは決議に華国鋒同志の名を書き入れ、その誤りを指摘した。これは全党と人民にとって有益であり、華国鋒同志じしんにとってもきわめて有益である。

そのほか、たとえば「文化大革命」の原因に小ブルジョア思想の影響をあげるべきかどうかという問題もある。決議ではふれていないが、これで悪くはないと思う。小ブルジョア思想の影響に反対する必要があるなら、将来、他の文書でとりあげても間にあう。ここでは、この問題にふれない。ここで批判すべきは、もう一つの問題だ。つまり、小規模生産は、毎日、毎時間、資本主義とブルジョアジーを大規模に生み出しているというレーニンのこの命題を誤解またはドグマ化して、まちがった引き写し方をしているという問題がそれである。こんど、「文化大革命」の原因にふれるときも、小ブルジョアジーのことにはふれなくてよいし、これまでの提起の仕方をそのまま引き写して、どんな誤りにもかならず社会的根源、思想的根源、歴史的根源の三つがあるなどと言う必要はない。こんどは新たな提起の仕方をしたが、これでよいと思う。

(一九八一年六月二十二日、十一期六中総予備会の間における談話)

